
学園東方～普通の私と風神様～

KEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園東方〜普通の私と風神様〜

【Nコード】

N0547I

【作者名】

KEN

【あらすじ】

私立東方学園に入学した東風谷早苗は、学園1のスターである風神の異名をもつ生徒、八坂神奈子と出会う。二人の少女が生みだす学園ライフとは一体どんなものなのか？基本風神録キャラ以外出ません

出会いというものは何事も突風の様で（前書き）

だいがキャラ設定に無理があるかと思いますがよろしく願います。

出会いというものは何事も突風の様で

私、まだ恋なんて知りませんでした。

私はまだ、子供でした。

今、私はこの素敵な風の吹く丘で、いとしいあの人を待ち続けています……

今年の春、私、東風谷 早苗は入学することの決まったこの『東方学園』の学校案内にきています。

親戚で、こここの在学生である諏訪子お姉ちゃんのご案内の下、学校を見学するつもりだったのですが、お姉ちゃんのまさかの寝坊により、校門で一人待たされている状況です。

校門には、綺麗な桜並木があり、多くの入学生がその美しさに見とれています。

私も見とれてはいたのですが、小一時間待たされては流石にあきてきました。

なぜあの姉はあそこまで寝坊をするのか、少し疑問に思うところもあります。

私のもう一度携帯をチェックしますが、やはり、返事はありません。はあー、とため息をついているとなんだか、受験に失敗した人に見えます。

もう、諏訪子お姉ちゃんのこととは放っておいて、校門をくぐろうとした時、

誰かが私の髪の毛を触ってくるのを感じました。

「お嬢さん、こんなに桜の花びらをかぶって、迷子にでもなりました？」

「……」

私は思わず振り返ってしまいました。

いきなり、初対面の人の髪を触ってくるなんて、大した不屈き野郎だと思いました。

しかし、振り返った時には、すでに私の心は奪われていたのかもしれない。

それが、私と……八坂先輩の……初めての出会いでした。

私の胸が高鳴るのを感じます。

この人の、瞳に吸い込まれていつてしまいそうです。

この人の、うつくし整った顔に見とれてしまいます。

「さつきから、まったくここから動かなかったから気になってね

私もこの生徒だからなにか困っているんだったら何か聞きたくて」

「は、ハイ!!」

思わず緊張して少し慌ててしまいます。

微妙に声が裏返ってしまいます。

とても恥ずかしくてうつむいてしまいます。

しかし、この人は私に話しかけてきます。

「せっかく出会ったんだし、今後合うかどうか分からないけど、

名前、聞かせてくれない？ 私は八坂 神奈子 神奈子って呼んで

ね この3年生だよ」

「わ、私はこ、東風谷 早苗です!!」

「早苗か、かわいい名前だね それじゃあ、いこっか」

「行くって、何処にですか？」

「何処って、学校見学に来たんでしょ？ 一緒に周ろうかってこ
と」

「そ、そんなダメですよ!! 私にだって待ち合わせがありますし
!!」

「でも、待ち合わせの人はお寝坊さんでしょ？」

「うつ!! まあ、そうですね」

「なら仕方ない、まあ、その人には罰ってことで行こうか!!」

「ちよ、ちよっと!!」

私は半ば、無理やり手を取られると神奈子先輩に手をひかれていった。

普通なら失礼千万な人だと思ったが、不思議と神奈子先輩にひかれる手は

いやな感じはしなかった。

諏訪子お姉ちゃんごめんなさいと心に少し思うと神奈子先輩の後をついて行った。

そのあと、神奈子先輩と私は色々な施設を周っていった。

やたら綺麗な学食やら、明らかに不必要な物までそろえてある売店、多くの本がそろった図書館や、自習室など隅からすみまで見たような気がする。

ただ、私の頭の中に残っているのは神奈子先輩の横顔だけだったのかもしれない。

「基本的な施設はこれで終わり、早苗 あなたまだ時間ある？」

「は、ハイ!! 時間ならたっぷり」

「そう、よかった なら、あんまり関係はないけど見てほしい場所があるの」

「見てほしい場所？」

神奈子先輩にまた、手をひかれる私、そのたび私の胸はすごくたかなる。

この人はそれが分かっているのだろうか？

本人に聞かなければわからないが当然そんなことはできない。

神奈子先輩は少し早足、といっても私にとってはすごく速い速度で足を運ぶ。

私もそれについてゆくと周りを森で囲まれた湖の前に出た。
少ししか人の手は加えられていないこの場所。

周りも山で囲まれていてとてもものんびりとしたような場所だ。

「ここは？」

「私のお気に入りのスポット」

「綺麗な所ですね」

「それだけじゃないよ」

「え？」

「見ててごらん 多分もうすぐ来るから」

「来るって何が…… キヤア!!」

神奈子先輩の言った来るものとは風だった。

それも他の場所とは比べ物にならないくらい強い風。

あまりの突風に私は眼をつむってしまったが少しして目をあけると

そこには、風を全身で受けるあまりにも神々しくて、

美しすぎる神奈子先輩の姿があった。

風が止むと神奈子先輩はこちらを振り向いた。

見とれていた私の髪の毛を優しくなでる。

「ごめんごめん 私癖っ毛が強くてあまり髪が崩れないから

平気なんだけど早苗髪がぐしゃぐしゃになっちゃってる」

「アッ!! 大丈夫です!! 自分で直せますから」

そういつて神奈子先輩の手を払おうとするがひょいっとよけられると
また、髪をなでる。

そして、少し顔を近づけると優しく語りかける。

「大丈夫 私にやらせて……」

「……」

あまりに緊張しすぎて私は黙ってしまう。

きっとこの人はジゴロの才能でもあるのではないのだろうか？

そして優しく話しかけてくる。

「早苗はさあ、もし私がまた会いたいっていったら会いに来てくれる？」

緊張のしすぎで声が出せないが黙ってうなずく。

「良かった　なら、一個少し遠い約束をしておこうか？」

「遠い約束？」

「うん、この秋、紅葉の季節にまた一緒にここに来る」

「秋に？」

「うん、秋にはねこの紅葉が一斉に空を舞う　そんなのを見に行きたいなって」

「なぜ私と？」

「理由はどうでもいい　なんとなくだから……それじゃあ、ダメ？」
なんか少し私に甘えた口調で言ってくる神奈子先輩はとてもきれいで、

どこかわいらしい子供っぽさがあった。

すこし、笑えてきてしまう。

「クスッ　いいですよまた一緒に来ましょう　神奈子先輩」

それだけ言うと、この後は何もしゃべらなかった。

なんだか、この人と私は相性がいいのかもしれない。

どこかでそんな気がした。

この学校見学も終わりを迎え、再び校門まで戻るとすっかり夕方になっっていた。

神奈子先輩と別れるのは少しもったいない気がするが、仕方ない。

「それじゃあね、早苗　帰りは気を付けてね。」

「あの、神奈子先輩……」

私の声に反応して神奈子先輩は振り返ると笑顔で手を振ってくれた。
私は神奈子先輩に感謝をこめて一礼すると少し駆け足で家に向かっていた。

この人生の中で一番ドキドキした日かもしれない。

そんな思いの中ふと、なにか忘れたことがあるような気がする。

何かは思い出せないが大切なことのような気がする。

ふと、時間を見ようと思って携帯を見た時思い出した。

着信ちようど100件洩矢諏訪子……

後が怖い……

出会いというものは何事も突風の様で（後書き）

初の小説投稿ということでもつたない文章かもしれませんがよろしければ感想等お願いします。

姉という名の性悪ガエル（前書き）

家に帰ってから寝るまでのお話

姉という名の性悪ガエル

家に着くと辺りはすでに暗い。

今日会った事を振り返りながら玄関を開けると、

きれいに並べられた靴たちと一緒に、

うちの学園の靴と同じ靴が置いてある……

気まずい気持ちがかみ上げてくる。

恐る恐るただいまと言つと家の二階からさっそうと

一人の人が降りてきた。

何歳か分からないそのルックス、行儀の悪さ、

蛙のように飛び跳ねる足音……

間違いない。諏訪子お姉ちゃんだ……

「姉を置いて行くとはこの罰あたりものめっ!!」

「いや、でも……」

「言い訳無用!! てーい!!」

なんか姉は格闘ゲームでありそんなジャンプ攻撃をしてくる。

「うわ!!」

とつさに身をかめると姉は私の上空を見事に飛んで行く。

私にくらわせるはずであった体当たりは無情にも、

玄関のドアに直撃してしまう始末であった。

「きゅ……」

伸びてしまった姉をリビングまで運ぶ私……

この人はどこまで妹に迷惑をかけるのだろうか……

「お姉ちゃん気がついた？」

「ぼーっとだが、姉が目を開く。」

「おいていかれたうらみっ」

もう、このひとは本当に何を言っているのだろうか？

リビングのソファ―に寝ている姉に声をかける。

「お姉ちゃん！！ たしかに連絡しなかった私も悪いけど
もともとお姉ちゃんが寝坊するからいけないんでしょ！！」

「あーうー それは悪いと思っています

ていうか ごめんなさい」

「分かればいいの こっちもごめんね」

「じゃあ、仲直りだ早苗、ハイ握手」

「ハイハイ……」

この人はいったい何歳なのだろうか？

いつもこの不思議なペースに飲み込まれてしまう。

そこが可愛らしく、私の好きな所でもあるのだが……

「お姉ちゃんって、何年生になるんだっけ？」

「私？ 三年生だよ」

「ならもう少しは大人に……っ」

三年生という言葉に反応してか一瞬神奈子先輩姿が、
脳裏をよぎる。

「どうしたの早苗？」

「なんでもないです！！」

つい、強く言っついしまった。

怯えさせていないだろうか？

「そんなこと言って……私がいなくて寂しかったんじゃないの？」
前言撤回！！ この生き物は、少しのことでへこむような精神は、
持ち合わせていない。

むしろ、人をいじるのが好きなタイプだった。

「寂しくなんて……ちよつとは寂しかったかな」

「ごめんねー ほんとに寝坊しちゃって

で、学校の見学はできた？」

「はい 一応」

「一人で？」

「いや……あの……一人です」

なんとなく、神奈子先輩と言ったのは恥ずかしいので
伏せておくことにしといた。

「ふん。誰か一緒に行つたんだ」

「……」

この姉は、なぜこういうことに関しては以上に勘がいいのか？
いくら親戚だからと言って似てなさすぎるでしょ……

「まあ、いいや 誰か素敵な人と行けたんだね

名前とかは聞かないから安心してよ。」

「……もう……」

ほんとに人をいじるのが大好きな姉だ。

きつとそう言いながら深い所にまでメスを入れてくるに違いない。
話題を変えなければ

「そういえば、お母さんは？」

「おじさんとおばさんならいないから私が

学校見学終わった後早苗の面倒見ることになってたでしょ？」

「あ」

「あゝ じゃない 早苗も微妙に抜けた所があるんだから」

「そうかもね」

やつぱり、血はつながっているのだろう……

「じゃあ、早苗ご飯作ってね……」

「ハア？」

前言撤回……！ こいつはやはりグータラした悪魔ガエルだ……

その後も何かと主導権を握られっぱなしで私は、この日を終えた。
やはり、たちの悪い姉だ。

お風呂につかりながら呟く。

「入学式では神奈子先輩に会えるかなあ……」

外にいたたちの悪いカエルはおもわず耳にしまった。
神奈子という名を……

姉という名の性悪ガエル（後書き）

半端ですいません

数多の出会いと奇跡の再会 前篇（前書き）

桜 雛を登場させます。雛のキャラ崩壊注意

数多の出会いと奇跡の再会 前篇

今日は、入学式。

満開の桜が咲いている校門には、多くの人がごった返している。私、東風谷早苗もその中に入っているのだが、今はそんなものは気にならない。

ぼーっと校門の前に突っ立っている私。

神奈子先輩と出会った場所……

そんな事を考えていると、後ろから肩を叩かれる感じがした。なんというか、デジャヴる感覚に、はっと後ろを振り返る。

もしかしたら後ろに神奈子先輩が……

と思っていたら後ろに立っているのは全く違う子だった。

なんか、何処となくか弱そうで、犬みたいな感じの子である。

「あの…… すみません」

突然声をかけられた私はビクツとしてしまう。

「な、何ですかいきなり!!」

「す、すみません さつきから何度か呼んだんですけど反応がなくて、てつきり死んでるんじゃないかと……」

「人が立ったまま死ぬと思います?」

「それもそうですね ところで……」

「ところで?」

「か、髪の毛にけ、毛虫が……」

「毛虫……」

一瞬時が固まる。

しかし、毛虫の存在を確認できた瞬間……

「いやああああアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!とって!!!!!!!!とって!!!!」

「いやあああああつあつああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

私は思わずその、犬つばいの方へ走って助けを呼んでしまった。しかし、そこも女の子だ。というかここは女学園だ。

そう取ってくれる人もいない。
私たちは入学式当日からいきなり大恥をかいてスタートしてしまっ
た。

なんとか、毛虫、実は5匹を追っ払った私たち。

特に何もしてくれてはいないが犬っぽい子に礼をいう。

「ぜー……ぜー……さっきはありがとう……ございます」

「どういたしまして。」

あれだけは知ったのにこの子は息一つ上がっていない。

それに足も速かったし運動神経は良いみたいだ。

「あの……」

「……何？」

「お名前聞いてもよろしいですか？」

私は犬走 椀といいます。」

「……私は東風谷 早苗……よろしく……お願い……しま……す」

まさか、こんな形で友達第1号ができるとは思わなかったが、
入学後の友達確保ができたのよかった。

入学式が始まり私と椀ちゃんは隣同士の席に座った。

座席自由の入学式……この学校多少アバウトすぎないか？

私と椀ちゃんは前でしゃべっているえらいさんの話を、
聞いているふりしながら椀ちゃんとひそひそ話をする。

「椀ちゃんは何でここに入ったの？」

定番の質問。

恋愛ものの好きの私はドキッとするような、
理由を聞きたい。

「両親が進めたんで」

「へえ」

つまんねー、っと心の奥で思う。

しかしだ、私も女学園で何を期待しているのだろう？

しかし、人の本性というものはすぐ見抜けるもので……

「それと……」

「それと？」

「アッ！！ いえ、なんでもないです！！」

顔が赤くなりながら慌てて発言をなかったことにする姿、素人目から見てもわかる。

恋…… かな

「好きな人でもいるの？」

「いや！！ そんなことは…… ないですよ」

「ふーん」

やはり、あの親戚の姉である、諏訪子お姉ちゃんと、血が繋がってるような気がする。

結構自分も人をいじるのが好きらしい。

そして、無意識に私は感じ取ってしまう。

「そ、そんなことより、生徒会長の話始まりますよ！！」

「あ、ほんとだ」

進行役の先生がいう。

「生徒会長の話」

私の頭の中を神奈子先輩がよぎる。

きつと、生徒会長なんかしてたらにあうだろうなって。

妄想してぼーっとなっている私。

桜ちゃんが不思議そうにこっちを見てる。

この子は鈍感そうなので助かる……

頭の中で神奈子先輩がスピーチしている姿を描く。

それだけでもかっこいいのに私の存在に気が付き、

ウインクなんかしてくれたらもう……

しかし、次に呼ばれた名前は私の妄想を見事に打ち砕いてくれた……

「生徒会長 洩矢諏訪子」

「ハーイ!!」

なんだよ……悪夢なら覚めてくれ……
目をこすってステージの方に目をやる。

……お姉ちゃんだ……

周りからもざわざわとした声が聞こえる。

それはそうだ。……どう見ても中……いや、小学生……

「新入生のみなさん コンニチワー!!」

ここまで馬鹿げた会長がいていいのだろうか？

神奈子先輩みたいな会長を望んだ私はいたい……

姉はそれから話し続ける。

「私も、今日は親戚の妹が入学してくるんで

とっても楽しみでえ……」

思わず頭を抱えてしまう私……

「大丈夫ですか?!」

隣の桜ちゃんの声も届かずまま、

私の最悪の入学式は終わりを告げた……

あの、馬鹿姉目……

私と似ている？

前言撤回だ!!!!!!!!!!

式も終わりみんな、指定されたクラスへ入る。

式のダメージを負った私はなんとか桜ちゃんに連れて行ってもらう
て、

席へ座ることができた。

「まあ、早苗ちゃん 入学したばかりなんだし、

何が原因か分からないけどとりあえず元気出してよ
楽しくいこ?」

確かにそれもそうだ。

まだ今日は入学初日。

ハッピースクールライフはまだ待っているかもしれないではないか
!!!!!!

「ありがとう!! 栞ちゃん!! とりあえずなんか元気出た!!」
思い切り栞ちゃんの手を両手で握りながら言う私。

もはや、やけくそだ。

気にはしていない!!!!!!

「う、うん よかったね……?」

結構栞ちゃんは困惑していたかもしれないがそんなことはお構いなし。

「あ、そろそろ先生来るみたいだから席に戻るね」

「うん、またね」

そうして栞ちゃんは席に戻っていく。

それと同時に私の中でゴングがなる。

そう!! ハッピースクールライフ作戦の始まりのゴングが!!

まずは、隣の席の子と仲良くなろう。

隣の席の子は……!!

私は思わず絶句する。

厄っばい!!

とてもきれいで、お嬢様みたいなリボンとかが
とてもよく似合っている。

しかし、厄っばい!!

こんな厄っばい子とつるんで大丈夫だろうか……

いけない!! 人を見た目で判断するのはよくない!!
私は思い切って、話しかけることにしてみた。

「あの……私、東風谷 早苗……よ、よろしくね」

「よろしく」

「あの、お名前は?」

「鍵山雛」

なんというか、しゃべりにくい。

おとなしいを通り越してこれは、
暗いんじゃないのかなあ？

「鍵山さんは、なにか趣味とかはあるの？」

「趣味……？ 回ること？」

なんなのだろうか？

私の頭で理解できる生き物なのだろうか？ この子は……

「回ることって……なにをするの？」

「普通に回るだけ」

「……」

理解不能！！話が全く分からない。

なぜ、こんな子が隣なのだろうか？

仕方ないので、私は鞆から小説をとりだして、
読んでいることにした。

多分この子を理解できないので……

しかし、小説を取り出すと彼女の目が変わる。

「……その小説……好きなの？」

「え！？ あ、ハイ 結構好きですけど……鍵山さんも好き？」

うん、とうなずいてくれる。

ここに来て話せるネタが見つかったかもしれない。

「意外だね この小説ラブコメなのに」

「主人公の不運さが好き……」

「……」

やっぱりそういう所ですか。

なんとなく分かってましたよ。

ギャグとか、恋愛描写が好きなんじゃないってところは、

「そういう点で行くと、早苗も好き」

「ヴェー！？」

唐突すぎる。なんなのだろう、この子？

「早苗も不幸っぽいから好き」

「あはは、そういうことね あははは…… そっ見える？」

黙ってこくつとうなずく。

ちよつとは、シヨックを受ける……

でも、大丈夫！！

この東風谷早苗！！ちよつと不幸に見えようが、

ハッピースクールライフは手に入れて見せるさ！！

「あと、馬鹿っぽいところも好き」

「結構言っね…… 鍵山さん……」

この子…… 毒舌家？

「あと」

「ハイ！？」

また毒舌砲を食らうのか？私？

「鍵山さんじゃなくて雛って呼んで」

「エッ！？」

こういういこにしては意外な一言、

これは、友達認証してくれたのかな？

「えつと…… じゃあ、雛…… ちゃん？」

名前で呼ばれることに少し照れているのか、

真っ白な頬が少し赤みを帯びているような気がする。

なんか、凄く可愛い。

「えつと、じゃあ雛ちゃん！！よろしくね！！」

「よろしく…… 早苗」

とりあえず、これは友達になれたってことだよな？

つまり、私のハッピースクールライフ作戦第1段階クリア？

なんか、当初の想像とは全く違うけどこれはこれで面白いかもね。

そっいえば、今って先生の話中だったような？

「東風谷さん 騒がないでください！！」

「は、はい！！？」

雛ちゃんとやり取りに夢中になっていて全く気がつかなかった。

雛ちゃんは器用に私としゃべり、先生の話も聞いてきたというのか

！！

結局私だけが先生に怒られて先生の話は終了した。

柊ちゃんがおろおろと見守っていた中、

隣の雛ちゃんがかすかに

「馬鹿っぽい」

といったのが聞こえた気がした。

……私のスクールライフ……大丈夫なのだろうか？

数多の出会いと奇跡の再会 前篇（後書き）

くだくだ

数多の出会いと奇跡の再会 後篇（前書き）

風陣録じつはあんまやってないんだよね（笑）

数多の出会いと奇跡の再会 後篇

一通り入学式やホームルームは終わり、私、東風谷早苗は雛ちゃんと桜ちゃんと廊下を歩いています。ついでに、二人は中学の頃からの友達だったらしいです。

「私が紹介する前に、早苗ちゃんと雛ちゃんが仲良くなるなんて意外でしたよ」

桜ちゃんが言う。

「雛ちゃん、昔っから、無口で友達作るの苦手だったから」

「苦手じゃない、する気がないだけ」

……それを苦手と言っんじゃないのかなあ？と私は思う。でも、なんでこの二人は仲がいいんだろう？

「なんで、二人は仲がいいの？」

「それは……」

「中学の時私と桜は新聞部だったから」

「へえ」

桜ちゃんはともかく、雛ちゃんが新聞部だというのは意外だ。

「じゃあ、二人はここでも新聞部に？」

「私はね」

桜ちゃんが言う。

「雛ちゃんは入らないんだ？」

「うん」

あっけなく答える。

なんとなく理由が聞きたくなる。

「なんで入らないの？」

「それは……」

「ちょっつと！！ 雛ちゃん ストープ！！」

「もがもが……」

「ごめんね 早苗ちゃん！！ 私たち用があるから！！」

それじゃあねえー！！！！」

「もがもが……！！」

凄いい勢いで雛ちゃんを連れて立ち去っていく椀ちゃん。
赤面してすごい勢いで走り去ってゆく様子。

素人目から見てもわかる。

椀ちゃんの恋は新聞部に関係ありってことかな……

結局廊下にポツンと一人つきりにされた私。

なんかむなしい……

このまま、一人とぼとぼ歩いて帰るのかなあっと
思っていた矢先のことだった。

廊下の階段から一人の人が降りてくる。

……小学生並みのサイズ……間違いない！！

「諏訪子お姉ちゃん！！」

「あー！、早苗！！こんなところにいたんだ。」

「いたんだじゃないですよ！！」

こっちは、先ほどのスピーチに腹がまだ立っている。

「なにが、親戚の妹が入るですか！！それとあのしゃべり方！！
あと、お姉ちゃん生徒会長だったら教えてくれればいいのに！！」

「いやー ごめんごめん 早苗 私もあの後結構反省したんだよ
直接早苗の名前言えばよかったって」

「そういうことじゃなくて、あんな恥ずかしい態度とって
私とその妹だつてばれたらどうする気ですか！！」

「気にしない 気にしない」

……この性悪女

ほんとにこんなので生徒会長が成り立っているのだろうか？

「それよりさ、早苗」

「なんいですか！！」

「私についてきてくれない？」

突然お姉ちゃんの周りの空気が真剣になる。
なぜ、普段からこうじゃないのだろうか？

「まあ、いいですけど……」

特に断る理由もない。

「良かった　なら来て」

「ちよつと!!……」

突然手をひっぱりだす姉。

半ば強引に私は引つ張られる。

お姉ちゃんの歩いて行く先は、古く歴史のある建物のようなだ。

あまり大きくはないが、立派な建物だ。

その建物の中に入るとお姉ちゃんは階段を上り建物の三階までいく。

木製の立派な扉には、生徒会室と書かれていた……

冗談ではない。

「お姉ちゃん　私生徒会なんて入りませんよ!!」

「あーうー　ひどいよ早苗」

「私がこういうもの嫌いってことは知ってるでしょ!!」

「あんまり人の上に立つのって好きじゃなかったね」

「分かってるんなら帰ります」

「ちよつと待つてよ　見学だけでもいいから」

「そうやってずるずると引き込む気でしょ　わかってますから」

「生徒会楽しいよ?　ハッピースクールライフできるよ?」

おもわずハッピースクールライフという言葉に反応する。

一応血を分けているといえよう!!　こちらの目標を察知するとは
!!

しかし、私は自分の美学を姉に言う。

「何も分かっていませんね　私のハッピースクールライフというの
は、

何の役職にも入らずのんびんだらりと友達と過ごしていると

ある日突然、白馬の王子様のような人が……」

「スイーツ（笑）」

「そついうなー!!」

私としたことが馬鹿姉のせいで廊下の前でこんなにもはしゃいでし

まった。

けっこうなボリウムだったらしく生徒会室の中にまで聞こえていたらしい。

生徒会室のドアが開く音がする。

「うるさいよ 誰？」

中から、女性にしては低めの声が聞こえる。

この声は、聞き覚えがある。

まさかと思うが中から出てきたのは……

「ただいま 神奈子」

神奈子先輩だ…… 生徒会だったんだ……

「なんだ 諏訪子か それと……早苗？」

私の中の時が止まる。

この人といると周りが何も見えなくなってしまう。

いまかるじてわかることは、神奈子先輩も驚いているということ……

「神奈子先輩……」

私名前を呼ぶと、神奈子先輩は少し微笑んでくれた。

「あーれー？ 二人とも知り合いだった？」

うちの姉の空気の読みなさは異常

「前、学校見学の時あってね…… 諏訪子は知り合い？」

「聞いて驚くなよ！！ 私は早苗の…… フゲラー！！」

私はとりあえず、お姉ちゃんに周りにあった重そうな石造でも乗っけておく。

「?????どうしたの」

「なんでもありません、あれはただの漬物ですから」

「そ、そう……」

神奈子先輩が苦笑いしながら私に言う。

すると、なんか地獄からの使いのような声が聞こえる。

「さくなくえく…… 親戚の姉を漬物にするとは…… 許さん！！」

こいつ、いいやがった！！

ある意味一番神奈子先輩にはばれたくなかったのに……

神奈子先輩が目を点にしてこちらをみている。

これと、同じ遺伝子持つてるなんて思わないで下さいよ？

「親戚……姉……なるほど、二人は姉妹なんだ」

終わったー！！石化する私！！

この馬鹿姉と姉妹にされた！！

飛びついてくる姉にも無反応でいる私。

私をぺしぺしと姉が叩いているがそんなのは関係ない。

私は放心状態……

「あのさ、二人ともさ、廊下じゃ迷惑だから……」

部屋の中はいろ？」

そういうと神奈子先輩は私の手を取る。

私の手に神奈子先輩の感触が届いた瞬間、

私の石化は一瞬にして解かれた。

そしてそのまま私と姉は生徒会室の中に入ってしまった。

生徒会室は結構豪華だ。

赤い絨毯が全面にひかれていて、歴史を感じさせる机と

本棚、そしてなぜかキッチンらしきものが完備されている……

なぜにキッチン……

あと、私を含めて現在人が5人。

私は客人用のいすに座り、他の人たちは指定の役職の席に座る。

神奈子先輩はまだ座っていない。

あいている席から考えると神奈子先輩は副会長の様だ。

なんで、姉が会長で先輩が副なのだろう。

あとの二人はと言うと、なんかかなり似ている。

双子の姉妹か何かだろうか？

「お待たせ」

そういうと、神奈子先輩はみんなにお茶を配る。

洋風の内装には結構似合わない緑茶だ……

「ありがとうございます」

そう言うとは、お茶を少し飲む。

お茶の味なんて違いはよくわからないがおいしく思える。

ついでに、うちの姉ははまだ、ふてくされている。

「みんなそろったことだし、自己紹介でもしよっかね？
諏訪子？」

神奈子先輩がお姉ちゃんにそういう。

お姉ちゃんは黙ってうなずくと二人組の人に目をやった。

「私が早苗に自己紹介しても仕方ないでしょ　まず、静葉からお願い」

すると会計の役所の人が立ち上がる。

年上だと思うが、ちよつと小さくて優しそうな人だ。

「私は秋　静葉　生徒会で会計をやっています

今2年生です　よろしくね」

「よろしくおねがいします」

自己紹介は結構淡々としているな……

次は書記の人が立ち上がる　静葉先輩に似ているが、すこし、活発そうな印象が持てる。

「私、秋　穰子　生徒会では書記やっています

静姉とおなじ2年生です　よろしくね」

しゃべり方も少しこっちの方が活発っぽい。

しかし、二人とも印象に残りにくい……

「背景二人の紹介も終わつたし、次加奈子お願い」

「「背景っていうなー！！」」

流石姉妹、そろって言う。

影が薄い事を気にしているんだろうか。

しかし、次はそれどころではない！！

なんたって、神奈子先輩の自己紹介だから……

「前にもあったわね　早苗　私は八坂　神奈子

生徒会副会長をやっているわ よろしくね 早苗」

「よ、よろしく願いします」

この人が早苗というたび、私の鼓動はものすごく早くなる。

「あーうー やっぱ私も自己紹介する

洩矢 諏訪子 生徒会長やってまーす 最後に早苗」

「今年入学いたしました東風谷 早苗です

生徒会に入る気はありませんがよろしく願いします」

わたしはドライにそうやっていう。

私に特別な役職は似合わないから。

しかし、みんなのリアクションは思ったより冷たい……

もつと驚くかと思ったのに……

「あーうー 早苗に入ってもらう気なんてあんまなかったよ はじめっから」

「じゃあ、なんで呼んだんですか!」

穰子先輩がいう。

「会長って自分と親しい人を生徒会室に呼ぶんですよ よく」

「それだけの為に……」

「それだけって結構重要なんだよ!!」

ここの生徒会選挙とかなないから、来年のいい人材探さないといいけないし」

「……」

私にとっでは何も関係がない

いい人ならいくらでもいそうだが……

「まあ、いいや、今日はどうせ仕事もないし

かいさくん」

「おつかれさまでしたー」

そう言つとみんな一斉に席を立つ。

どうやら今日はもう終わりみたいだ。

私も帰ろうかなっと思つた時姉がいきなり声をかけてきた。

「あー!! そういえば早苗と神奈子家の方面

おんなじだから一緒に帰ったら?」

「あ、いいですねー」

姉と穰子先輩はそういう。

静葉先輩もうなずく。

「いきなり何言ってるんですかー!!」

流石にこれは反対しなければ、

いきなり言われても心の準備がない。

しかし、神奈子先輩は私の手を取るといふ。

「早苗は嫌?」

「うつ……!!」

嫌なわけではない。

それにそんな言われ方した了承するしかないだろう。

「分かりました……一緒に帰ります」

「あーうー素直でよろしい」

クツ!!この性悪女!!

「じゃあ 諏訪子 私と早苗は先に帰るわ」

神奈子先輩はそれだけ言々と私の手を引っ張り、

ドアを出ていった。

「じゃあねー」

それだけ言々と姉たちは手をふって私たちを見送った。

生徒会室には3人しかいなくなる。

「いいんですか?」

静葉が聞く。

「何が?」

「いきなり神奈子先輩と帰らせるなんて」

「なんで?」

穰子も言う

「だって、この学園のスターですよ!!」

帰り道見られたりしたら大変なことになりますよ?」

「あー、そっかー まあ いいんじゃない?」

「軽いですねえ 会長」

秋姉妹二人は声をそろえてそう言った。

それにしても、諏訪子がご機嫌そうなのが気になる。

すると、諏訪子は誰にも聞こえない位小さな声で呟いた。

「神奈子には幸せになって欲しいからね……」

私、東風谷 早苗は現在、日も暮れてきたところに

あこがれの神奈子先輩と一緒に下校をしています。

ハッピースクールライフに向けて、一言でも多く、

喋ろうと思ったら、姉の話題で盛り上がってしまいました。

「ハハハ、じゃあ、学校見学のお寝坊さんは諏訪子だったのかい」

「笑い事じゃないですよ 私も困ったんですから」

「ふふっ そうだね でも、全くあの子らしいわ」

盛り上がっている話が姉の寝坊というのは、

何となく嫌だが話題にかけることはないので感謝すべきだろうか……

「でも、諏訪子には感謝するべきね」

「え！？ どうしてですか」

「あの子のおかげであなたにあの日会えたから」

「……」

この人はよく恥ずかしくもなくそんなセリフが言えるな……

並みの女子なら既にダウン寸前であろう

ついでに私は、爆発寸前。

「早苗はさあ、あの子のこと好き？」

「お姉ちゃんですか？ まあ、好きですよ」

特に嫌いになる要因もないのでそう言っとく。

「なら、良かった」

神奈子先輩が笑顔でそういう。なんだろう……

姉の話をしている時の神奈子先輩はなんか、
楽しそうだ。

不思議な感じがする。

姉と神奈子先輩の関係っていったい何なのだろう？

興味はあったが聞かないでおいた。

なんだか聞いちゃいけない気がした……

しばらく歩くと丁字路に出た。

私は左だが、神奈子先輩は右らしい。

要するにここでお別れだ。

なんだか、しゃべっている時間はとても楽しくて、

ここで別れてしまうことがとってももったいない気がする。

私は思い切ってもう一緒に下校する約束を試みた。

「あの、神奈子先輩 また、一緒に帰ってもいいですか？」

神奈子先輩は笑顔でこたえる。

「いいよ でも、私生徒会終わってからしか帰れないから遅いよ？」

「いいんです そんなことは！！」

「そつ、そう？ ならいいんだけど」

しまった！！私としたことが気迫が入りすぎてしまった！！

神奈子先輩を絶対に困らせた もしくはひかれた気がする！！

しかし、神奈子先輩は笑顔で言う。

「じゃあ、こんなのはどう？」

生徒会には入りたくないのなら登録しなきゃいい

その代り私の補佐役として働くっていうのわ？」

驚きの提案だ。

確かに私は生徒会という肩書が嫌いなだけであって、

仕事は別に嫌いではない。

しかも、神奈子先輩の専属で働けばいいとなれば話は別である。

むしろ、この人のもとで働けるなら、

粉砕骨折しても働くだろう。

「分かりました その条件で働きます!!」

力いっぱいそう言うのと神奈子先輩は笑顔で言ってくれる。

「そう!! よかった なら、明日朝7時40分ごろここで会いましょう」

「ブっ!!!!!!!!」

なんということだ!!

投稿の約束までしてしまえるなんて……

きっと私のハッピースクールライフはいきなり約束されてしまったのだろう。

それから、笑顔で神奈子先輩に別れを告げると、

とっても軽やかな足取りで家に帰った。

きつと、歩幅5メートルぐらいのスキップをして帰ったのではないのかと思った。

そして私は薄々感じ始めていた……

神奈子先輩に対する恋心というものを……憧れよりも強い心というものを……

そのころ、早苗と神奈子はまだとられているなんて知らなかった。

東方学園の制服を着て、新聞部の腕章をつけたカメラ娘がいたという……

久々のビッグニュースに興奮してやまない人物が一人……

彼女はその名を、射命丸 文といった……

数多の出会いと奇跡の再会 後篇（後書き）

ぐだぐだ感がすごい

風神様と恋する少女（前書き）

文を登場させます。

風神様と恋する少女

朝……今日は何と言ってもすがすがしい朝だ。

普段は姉と同じで朝に弱いのだが、今日の朝は、早起きに何の苦痛も感じない。

理由は簡単、神奈子先輩との待ち合わせがあるから……

つということで、私、東風谷早苗は、

風のように一瞬で身支度をする、

風のように一瞬で約束の丁字路まで行きました。

しかし、まだ約束の時間までにはかなりの時間がある……

「ハー、まだ、30分前だよ……こんなことなら、もつとゆつくり家を出ればよかった……」

つくづくそう思う。

何事もあせりすぎは良くないのだ……

「でも、神奈子先輩との登校か……」

頭の中に神奈子先輩の姿を思い浮かべる。

あの人なら、うちの白と青の制服より、

赤の方が似合いそうな気がする。

そんな姿を思い浮かべていると、

顔がつい、ニヤけてしまう。

しかし、ハッ和我に気がつく。

いけないいけない。

せっかく神奈子先輩に朝一から会えるのに、

ニヤニヤ顔をいきなり見られてしまうわけには行かない。

現実に目を戻し、そつと前の方を見てみると……

「おはよう 早苗」

目の前には、神奈子先輩の顔がすぐ、間近にあった……

きれいな肌をしているし、顔は凛々しく整っているし、

目もきれいでまつ毛も長い……

そんなまるで、美の女神のような顔が間近にあったのだ私はものすごい勢いで後ろに下がる。

「か、か、神奈子先輩!! おはようご、ございます!!」

突然のことなのですぐくびくりしてしまった。

我ながらに情けない……

「はい、おはよう早苗 朝から元気がいいねえ」

「そ、それほど……」

褒められているのか、馬鹿にされているのか……

「それに、約束の時間まで結構まだあるけど……待った?」

「いいえ! そんなことないです!! まだ、来たばかりです!

!」

特に嘘はついていない 実際さほど待つてはいない。

というか、今ここに神奈子先輩がいるってことは……

「なんで神奈子先輩がもう、ここに?」

「多分、早苗と同じじゃないかな? なんだか待ち遠しくて、ついね」

なんか、そう言われるだけで嬉しい……

「それに……」

「それに?」

「この時間の方が何かと都合がいい」

「?」

都合がいいとは、どういうことだろうか?

たしかに、朝早く学校に行けた方が、遅刻もないし、

事業の準備もできると思うが……

「ま、いいや まだ時間じゃないけどもういいっか?」

「ハ、ハイ!!」

つということで、私と神奈子先輩の記念すべき初登校が、始まった……

私のハッピースクールライフ計画レベル300を一気にこなしているようだった。

しかし、まだ気づいてはいなかったのだ。
後ろから忍び寄る人影に……

神奈子先輩との登校は、特別何も起こらなかったが、
とても楽しかった。

それに、いつも通りにドキドキした……

そんな、神奈子先輩とげた箱まで一緒に来ていた。

「ここが、私のげた箱だから、授業終わりはここに来てね？」
「はい！」

そういうと私と神奈子先輩は別れていった。

ここ、私立東方学園では、授業は初日から行われる。
といわれても、全てがオリエンテーションみたいなもので、
授業っぽくはないが……

だから、こんなに浮かれている私でも怒られることはなかった。

「早苗」

隣の雛ちゃんが声をかけてくる。

「なに、どうしたの？」

とてもいい笑顔で私は雛ちゃんの方を振り向く。

今に思うと自分でもウザい。

「なんかいいことあった？」

「ちよつとね」

真に自分でもウザい。

雛ちゃんもダメだこりやつといった表情を浮かべると、

今説明されている教科書に目をやった。

私は、国語の時間に数学の教科書を出していたが、
特に問題はなかった……

そんな様子で授業を乗り切った私、
そして今はお昼休み。

みんなと少し話したが、お弁当を持ってくるとの事だったので、
私もお弁当を持ってきて、雛ちゃんと椀ちゃんと一緒に食べている。
一般的な弁当の私にたいし、

雛ちゃんはパンのみ、

椀ちゃんはともかわいらしいミニサイズのお弁当を持ってきていた。

「早苗ちゃんはお弁当手作り？」

椀ちゃんが聞いてくる。そんなわけない。

「違うよ、お母さんが作ってる　椀ちゃんは？」

「私は手作りだよ」

「へえ　凄いね」

本当にすごいと思う。

とても高校一年生が作ったとは思えない出来である。

「でも、なんでそんなにうまく作れるの？」

「え！？」

なんだか椀ちゃんは困ったようなそぶりをみせる。

そして、あわてながら言う。

「あのね、あの、私たちの中学お昼お弁当だったからね　それだけだよ」

「ふーん」

それだけにしては様子がおかしい。

すると、雛ちゃんがかなり意地悪そうな顔をしながら言う。

「椀はねえ、憧れの先輩のために、ふが、ふが」

「ちよつと、雛ちゃん！！　あ、早苗ちゃんなんでもないのよ　ふふふつ……」

慌てて雛ちゃんの口をふさぐ椀ちゃんの姿……

どんな人でもそこまでやれば分かっちゃいますって……

一瞬空気が固まったが椀ちゃんが私に聞く。

「……分かっちゃいました？」

「なんとなく」

私がそういうと、椀ちゃんは顔を赤らめながらうつむいてしまった。

なんだか、申し訳ないような気もするが……だが、思い切って、というか純粹に気になるので、

私は椀ちゃんに聞いてみることにした。

「椀ちゃんの憧れの人ってどんな人？」

「え、とね、あの……」

「新聞部の先輩」

詰まる椀ちゃんの代わりに雛ちゃんが答える。

「ちよつと！！ 雛ちゃん！！」

うるたえる椀ちゃんをお構いなしに雛ちゃんと言う

「一つ上の先輩だね この学校に入学してるの」

「へえー そーなんだー」

相変わらず椀ちゃんはうるたえている。

しかし、多少冷静さを取り戻したようだ。

私は気になるので、少し椀ちゃんに聞いてみる。

「どんな人なの？」

「え！？、あの……ね、凄く……かっこいい人」

「かっこいい？」

「うん、ちよつと暴走してて、いい加減で、空気の読めない人だけど……」

「かっこいいの……」

「ふーん」

赤くなりながらそう言う姿は、どう見ても恋する乙女だ。
むしろ、それ以外には見えない。

「それでね、桜はその人のために毎日弁当を作っていてね」

「ちよつと!! 雛ちゃん!!」

たぶん、雛ちゃんの言っていることは本当だろう。

それにしても、この人も嫌な性格をしている。

わたしは、少し雛ちゃんがうるたえる姿を見たくなったので、

雛ちゃんにも質問してみた。だが、思い切って、というか純粹に気になるので、

私は桜ちゃんに聞いてみることにした。

「桜ちゃんの憧れの人ってどんな人？」

「え、とね、あの……」

「新聞部の先輩」

詰まる桜ちゃんの代わりに雛ちゃんが答える。

「ちよつと!! 雛ちゃん!!」

うるたえる桜ちゃんをお構いなしに雛ちゃんと言う

「一つ上の先輩だね この学校に入学してるの」

「へえー そーなんだー」

相変わらず桜ちゃんはうるたえている。

しかし、多少冷静さを取り戻したようだ。

私は気になるので、少し桜ちゃんに聞いてみる。

「どんな人なの？」

「え!?!、あの……ね、凄く…… かっこいい人」

「かっこいい?」

「うん、ちよつと暴走してて、いい加減で、空気の読めない人だけ
ど……」

かっこいいの……」

「ふーん」

赤くなりながらそう言う姿は、どう見ても恋する乙女だ。

むしろ、それ以外には見えない。

「それでね、桜はその人のために毎日弁当を作っていてね」

「ちよつと!! 雛ちゃん!!」

たぶん、雛ちゃんの言っていることは本当だろう。

それにしても、この人も嫌な性格をしている。

わたしは、少し雛ちゃんがうるたえる姿を見たくなったので、雛ちゃんにも質問してみた。「雛ちゃんはなんか、そう言うことはないの？」

「ない 人のそういう姿を見てるのが好き」

真顔でそう言われた……

たぶん本当のことだろう……

うちの姉よりたちが悪いかもしれない……

これ以上は無駄なので私は、すぐ話を元に戻す。

「じゃあ、桜ちゃん。その人は何て名前なの？」

「な、名前ですか!？」

やっぱりかなりうるたえている。

しかし、いう気になったのか分からないが私の方を向くと、覚悟を決めたような顔をする。

「えっとね…… 名前よね？ そのね、しゃめいまる……」

桜ちゃんがその人の名前を言いかけた時だった。

突然教室のドアが勢い良く開けられる。

「清く正しく東方学園新聞部 射命丸 文 参上!!」

なんだか、突然とても元気な人が入ってきた。

騒がしい。

しかし、桜ちゃんの様子を見ると、顔を赤らめながら言う。

「あ、文先輩!! どうしてここに!？」

「あ、桜!？ あんたこのクラスだったんだ 奇遇ねえ」

なんとなくだけど、このやり取りだけでもわかる。

念のため涼しい顔をしている雛ちゃんにも聞いてみた。

「あの人が、桜ちゃんの憧れの人？」

我関せずといった様子の雛ちゃんは、

自分のパンをかじりながら、黙ってうなずいた。

……この人なんだ っと思つて射命丸先輩の方へ目をやると、

「あー!! いた!! あなたね あなた!! ちょっとこっちに来てちょうだい」

きよろきよろとあたりを見渡す。

射命丸先輩はびしつと指をさしているがその矛先はどうかやら私のようだ……

「私ですか!？」

何の心当たりもない初対面の人に私は呼び出されているみたいだ。

「そう、そのあなた えっと、名前は東風谷さんね

少し質問したことがあるのでこっちに来てくださーい」

それだけいうと、私は半ば引きずられるように教室を出ていくことになった。

いったい何を私はしたんだろう？

新聞部？ ネタになることなんて私にはなさそうだが……

そのころ、教室に残された栞と雛はと言うと……

「雛ちゃん……後をつけるよ」

「嫌だ めんどくさい」

「あ・と・を・つ・け・る・よ」

そういうと、栞に半ば引きずられるように雛は教室を出ていった。

「……」

過去に見覚えのないくらいを殺気を雛は感じていた……

私、東風谷早苗は今、新聞部の部室にいます。

なんか、新聞部の部室はパソコンやらプリンターやらが、

完備されているのに古そうな木造建築で、

あまり調和を図れていない気がする……

私はどうやら客人用のソファーに座らされると、

対面するように射命丸先輩が座り、話を始められた。

「はじめまして、東風谷早苗さん 私は東方学園2年新聞部部長をやっている射命丸 文と申します」

「はあ……」

さっきのドタバタした様子とは違い、今は丁寧な口調で話している。

「私は、1年の東風谷 早苗です」

あの、射命丸先輩は私に何の話を？」

まどろっこしい言い方はせず、単刀直入に聞く。

「ああ、そう言えばまだ何も言ってなかったわね

じゃあ、ずばり、単刀直入に聞くけどいい？」

「はい……」

「あなた、昨日八坂先輩と一緒に帰ってたでしょ？」

「え！？」

なんで知っているのだろうか？

というかそんなこと聞いてどうする気なのだろうか。

「証拠ならあるわよ ほら」

そう言うのと射命丸先輩は手帳から何枚かの写真を取り出す。

そこにはばつちりと、私と神奈子先輩が写っていた。

「はあ、まあ、神奈子先輩とは一緒に帰りましたけど……」

それが何か？」「それが聞きたいのよ なぜあなたみたいな

新入生がいきなり八坂先輩と一緒に下校できるかってことを」

「……？」

言ってる意味がよくわからない。

特に何にも問題はなさそうだが？

「あの、言ってる意味が……？」

「それだけじゃないわ！！」

すると別の写真を取り出す。

すると、そこには私と諏訪子お姉ちゃんが一緒に写っている

写真があった。

「……何勝手に取ってるんですか！！」

流石に腹が立つ。

勝手に写真を撮られるのは気に障る。

「あら、盗撮したことはごめんなさい

私いいネタがあると周りが見えなくなっちゃって……

でも、それより……」

「それより？」

射命丸先輩はすぐまじめな顔になって私に問いたです。

たしかに、この様子は桜ちゃんの言う通り、かつこいいかもしれない。

「あなた、この二人のこと知ってるの？」

「知ってるかって言われても……」

諏訪子お姉ちゃんは親戚の姉だから知ってるけど、
神奈子先輩のことはまだ何も……」

「洩矢先輩が姉！？」

「はい……　そうですけど　何か？」

何が凄いのだろうか？

凄く驚いているようだ……

「あなた、妹さんなのに全く知らないのね！！

あのお二方の学園での凄さを！！」

「凄さ？」

少なくとも神奈子先輩はすごいと思う。

でもお姉ちゃんはどうなんだろうか？

「そうねえ、じゃあ教えてあげるは二人の凄さを」

「はあ……」

なんとなく興味があるので聞いておきたい。

「じゃあまず、あなたの姉である洩矢先輩からね
頭の良さはトップクラス　運動神経もよくて

特に平泳ぎでは県記録をもっているぐらいの人よ」

「そうだったんだ……」

自分の姉が実は恐ろしいスペックの持ち主だったようだ。

「それだけじゃないわ 誰に対してもフランクで
優しい方でまた、独特のかわいらしさでとても人気があるのよ」

「人気……」

それは分かる。

お姉ちゃんとはなにかと人気者だったから……

「ファンクラブも存在しているわ

現在は私の調査で行くと256人ファンをしているわ」

「ブッ!!」

256人もあの姉に……

「しかも新入生も入ってきたことだし、
多分もつと増えるんじゃないかな」

知らなかった……あの姉がそんなにもファンを持っていたなんて……

「そしてね 次の人が問題のお方八坂先輩」

「神奈子先輩ですか？」

「ええ、八坂 神奈子先輩

こちらも成績、運動何かもトップクラス

ていうか、相手になるのが洩矢先輩ぐらいしかない」

「……」

先ほどから何回も思っているがあの姉がねえ……

「それでさ、ルックスがあれでしょ

だからねえ、凄くモテモテでね

ファンクラブもすぐくてね……

私も数えれてないんだよ……」

やっぱりそうなんだと思う。

「それでね、あの人は毎日のように告白とか受けてるわけ
一回もOKしたことはないらしいけど」

…… 大体話が分かってきた。

「っていうこは私のような新入生が

いきなり神奈子先輩と親しくしていたら、

こころよくなく思う人たちがいるってことですね」

「そういうこと 私が一番言いたかったのはそれ、

あの人は、特別な方だからね

会うんなら隠れて会いなさいってこと」「そうですか……」

確かに、学園生活始まっていきなり上級生に目は付けられたくない。

ここは、従うべきだろう……

「私もねえ、色恋沙汰とか好きだからねえ

いつもなら記事に書きたいんだけど……

あー!! 勘違いしないでね!! ちゃんと許可をもらって書くから」

「はあ……」

「でも今回は伏せておくわね

っていうか、もともと忠告したかったただだし」

「……なんだかよく分からないけどありがとうございます」

「いいのよ、別に」

しかし、疑問に思うことが一つある……

「あの……色恋沙汰って……」

「えー? 好きなんでしょ? 八坂先輩のことが」

「ぶっ!!」

この人は何を言っているんだろうか?

好き? 神奈子先輩の事を私が……?

「ち、違います!! そうじゃないです!!」

「あら、じゃあ、どうなの?」

「えっと、私は、神奈子先輩といると……」

ドキドキはしますし、鼓動が速くなる気はしますが……」

「なら、やっぱり好きなんじゃない」

言われてみるとたしかにそうだ。

自分のよく読むラブストーリーの感情と一致している気がする。」

そうですか……」

確かに、学園生活始まっていきなり上級生に目は付けられたくない。

ここは、従うべきだろう……

「私もねえ、色恋沙汰とか好きだからねえ

いつもなら記事に書きたいんだけど……

あー！ 勘違いしないでね！！ ちゃんと許可をもらって書くから
「はあ……」

「でも今回は伏せておくわね

っていうか、もともと忠告したかったただだし」

「……なんだかよく分からないけどありがたいがとうございます」
「いいのよ、別に」

しかし、疑問に思うことが一つある……

「あの……色恋沙汰って……」

「えー？ 好きなんでしょ？ 八坂先輩のことが
「ぶっ！！」

この人は何を言っているんだろうか？
好き？ 神奈子先輩の事を私が……？

「ち、違います！！ そうじゃないです！！」

「あら、じゃあ、どうなの？」

「えっと、私は、神奈子先輩といると……

ドキドキはしますし、鼓動が速くなる気はしますけど……」

「なら、やっぱり好きなんじゃん」

言われてみるとたしかにそうだ。

自分のよく読むラブストーリーの感情と一致している気がする。た
だ、今まで恋したことがないから分からなかったただけなんだ……

「……ひかないで下さいね？」

なんとなく私は射命丸先輩にそういう。

すると、射命丸先輩は突然大笑いしだした。

何が起こったのかよく分からない。

おかしいことでも言ったのだろうか？

「ごめんなさいね、そんなことでひくぐらいだったら私、
今頃学校に来てないわ」

「どうしてですか？」

「フフッ、だって私は新聞部部長の射命丸 文

でも、二つ名は恋愛相談人 射命丸よ

ひくわけがないじゃない」

「そうなんですか……恋愛相談人!？」

「そう なんかね、この学園恋愛相談を私によくするのよだからね、早苗ちゃんも機会があつたら私に相談してね?」

「は、はあ……」

一応私も世間とは多少ずれのあるこの学園の噂は知っていたが、こんな人がいるまでとは、知らなかった。

「あー、楽しかった ってもうそろそろ昼休みも終わっちゃうわね何かあつたら言いに来てね? よくここにいるから」

「はあ……」

「それと、あなた椀と友達?」

「あ、はい」

「それじゃあ、あの子に伝えといて

放課後新聞部部室で待つてるって……」

「分かりました」

「それじゃあね、早苗ちゃん」

「どうもありがとうございました。」

そういうと、私は新聞部部室から出ていった。

廊下を歩きながら私は今わかったことをまとめてみる。一つは、お姉ちゃんと神奈子先輩はすぐ人気があるということ。

二つ目は、神奈子先輩に会うときは密かに会えということ。

三つ目は、私は神奈子先輩のことが好きなんだということ……

多少混乱はあるが、私はこの状況を面白く感じていた。

険しくない山より険しい山を登り切ったほうがおもしろいに決まっている。

きっと、この学園生活は私と神奈子先輩の恋愛を成就させるためのものなんだ。

そうとわかれば、話ははやい。

今日から、私はラブハンター早苗になればいいのだから……

そんなくだらない事を考えながら歩いていると、
何処からか視線を感じる。

どこかと思つてあたりを見てみると、

そこには、なんか危機迫つた様子の椛ちゃんと、
振り回されてきたような雛ちゃんが立っていた。

「椛ちゃん、雛ちゃん いったいどうしたの？」

聞いてみるが、雛ちゃんからは返事がない……というか出来そうに
ない。

「早苗ちゃん……文先輩と一体何をしゃべっていたの!？」

「……」

言えるわけがない。

というかなぜ、言わなきゃならないのか……
とつさに私はいい嘘を思い付く。

「あ、あのね、私つて生徒会長の諏訪子先輩の親戚の妹なんだ
本当にそうなのか確認されていただけだよ？」

「本当に?」

「ほんとに本当!」

目が怖い いつもの小型犬の目でなくて、

これは獲物を狙う狼の目だ……

「怪しいなあ……」

なぜ、こんなにも疑うのだろうか?

この子、射命丸先輩のこと好きすぎではないのだろうか?

そういえば、さつき射命丸先輩から伝言を頼まれたんだつた。

「あ、あとね 射命丸先輩から椛ちゃんに伝言が一つあってね」

「え!?! 本当に!?!」

突然今度は遊びたい小型犬のような目になる。

色々忙しい子だ。

「で、内容はなに!?!」

凄く聞きたそうだ。

「えつとね、今日の放課後新聞部部室で待つてゐるって」

「ほんとに!？」

なんだか、栞ちゃんが今までにないくらいに飛びあがっている……これが、恋のパワーか……恐ろしい。

奇声を挙げているがそんなことはお構いなしようだ。

「さつきは、疑ってごめんね 早苗ちゃん!！」

そういうと栞ちゃんは恐ろしいスピードで走り去っていつてしまった。

おとなしそうな子だが、暴走するときにはするんだなと思う。

私ひとりポツンと取り残された気がしたが、

足元を見ると雛ちゃんがまだいた。

どうやら、しゃべれるようにはなっただけ。

「栞ちゃんってさ 中学の時からあんな感じ？」

「うん……文先輩が絡むとあんなる」

「恋する乙女だね」

「うん」

「雛ちゃん 歩ける？」

「無理……」

ということなので、私は雛ちゃんを教室までおぶってあげました。普段は不思議な雛ちゃんもこういう風になると可愛かった。

「早苗は 恋してるの？」

突然雛ちゃんがそんな事を聞いてくる。

この子はいきなり突拍子もない事を聞いてくるな……

「い、いきなり何を言い出すの!! 雛ちゃん!!」

「なんか、ちよつと栞に似てたから」

本当にそうなのだろうか？

まあ、恋をしているのは事実だし似ているのかもしれない。

「ふふふつ、どうかなく？」

ちよつと、はぐらかし気味にそういうと雛ちゃんは、

後ろでクスリと笑ったのがわかった。

勘のいいこの子ことだから、気付かれたのかもしれない。

まあ、この際どうでも良かった気がした……

生徒会長である洩矢 諏訪子はひとり呟く。

「早苗……障害は多いけど頑張っ
てね……」
と。

風神様と恋する少女（後書き）

早苗のキャラが安定しない。

計画 新歓パーティー（前書き）

だらだと

計画 新歓パーティー

授業が終わると私はすぐにみんなと別れて、3年生のげた箱へと向かった。

椀ちゃんと雛ちゃんは新聞部へ行ったらしい。

雛ちゃんは引きずられていったようだが……

とりあえず、ここで神奈子先輩が来るまでまとう。

しかし、神奈子先輩が来たらいつたいどうしたらいいのだろう？

射命丸先輩からはあんまり目立って会うなって言われてるし……

でも、実際神奈子先輩の人氣ってどのくらいあるのだろう？

この目で確かめてみたい氣もする。

とりあえず、まだ神奈子先輩は来そうにない。

しかし、何人かの人たちはげた箱をはっているし

ちらほらと二年生の先輩も集まってきたようだ……

なんとなくが分かる。

熱氣が伝わってくるのを感じる……… なんとかアイドルの追っか

けて、こういう感じなんだと分かる。

はたから見れば、異様なような氣がするが……

迷惑なのではないのだろうか？

みんな、神奈子先輩を王子様とでも思っているのだろうか？

なんとなく、私は妄想を始める？

神奈子先輩には王子様の着る制服も似合いそうだが、

私としてはそれよりも大人の女性っぽさが漂ってきそうな

着物姿なんかが似合いそうな氣がする。

それも紅葉柄の赤い着物を着て髪を結えば物凄く美しさが映えるの

ではないのだから？

思わず、妄想の世界に行ってしまうニヤニヤしている私……

なんか、朝と同じような氣がする。

しまったと思い、デジャヴを感じながら視線を上にあげると

「どうしたの？ 早苗？」

朝と同じように神奈子先輩の顔が目の前にあった。

「か、神奈子先輩！！ いや、ね、あの」

うるたえながら凄い勢いでバツクする私。

しかし、神奈子先輩が私の手を掴むと自分の方に寄せる。

「早苗、どうしたの？ はやくいこっか？」

「は、はい！！」

時が止まるような感じがした。

この人が触れると私の中の時が止まる……

私は神奈子先輩が歩き出すとそのあとをついて行っただ。

しかし、よく考えるといきなり射命丸先輩の忠告を無視してしまっ
たような気が……

あたりの方を見渡すと、なんだかみんな目が怖い気がする。

というか睨んでる、私には視線が突き刺さる……

「早苗」

「は、はい！！」

突然神奈子先輩が名前をよんできたので、ドキッとしてしまった。

「落ち着かないみたいだけどどうしたの？」

「そんなことないですよ！！ そんなこと……ただ」

「ただ？」

この際はつきりと言おう。

「周りから凄い見られている気がする」

「周り？」

そういうと神奈子先輩はあたりを見渡す。

するととても困ったような顔をする。

「彼女たちのことか……」

「凄い人気なんです…… 神奈子先輩」

「そういつてくれると嬉しいわね」

ははっと笑う神奈子先輩。

しかし、少しだが嬉しくなさそうな感情も見えたような気がした……

しばらく歩くと私たちは生徒会室のある校舎についた。

神奈子先輩の下で働くことになった私はここに行かなければならない。

「早苗が私の下で働くってことはもう言ってるから」

「そうですか」

「うん、だから遠慮せずにはいつてね」

「わかりました」

それだけ言うと、私と神奈子先輩は生徒会室に入ってしまった。

なかには、もう他の人たちはそろっていたようだった。

「おーそーい」

中に入るとさっそくお姉ちゃんがさういう。

「ごめん、早苗と一緒に来たからね　ちょっとおしゃべりに夢中になっちゃって」

「へー、あ！　早苗も一緒か」

私はうなずく。

「まあ、いいや　二人とも座って　今日はやることがあるから」
つとということで、そんな感じで生徒会は始まっていった。

ついでに神奈子先輩の横に座れるのでちょっとラッキーかもしれない。

お姉ちゃんが言い出す。

「じゃあ、今日は何についてやるかということなんだけどね

1週間後に控えた新歓パーティーについてやりたいと思います。」

「パーティー？」

私は聞く。

「うん　生徒会主催のパーティー　1年生強制参加の
そのことでね、大体の計画は決まってるからみんなに見てほしいんだ　穰子　あれだして」

「ハイハイ」

すると、みんなに1枚のプリントが配られる。
書いてあることは単純だ。

- ・ 1 挨拶
- ・ 2 部活紹介
- ・ 3 生徒会紹介
- ・ 4 立食パーティー
- ・ 5 ゲーム（未定）
- ・ 6 お開き
- ・ 7 フリータイム

…… ありきたりな内容

少なくともゲーム（未定）とフリータイムは気になるが……

「もう、段取りも大体決定したんだけどね

ただ、ゲームだけが決まっていなかったんだよね」

姉はそういうと静葉先輩はいう。

「やっぱり、パーティーでゲームって言ったらビンゴですか？」

「却下」

まさかの神奈子先輩が口をはさむ。

「新感覚の事やらないと面白くないでしょ？」

ビンゴとかすごくありきたりだし」

「うーん そうだねえ……」

新しいものの好きの神奈子にはものたりないねえ

じゃあ、私たちがコスプレを」

「却下」

また、神奈子先輩が言う。

ごもつともだちだと思います。

ちよつと見たいけど……

「じゃあどうするの？ 一応私は意見考えてきたけど」

「真面目に？」

私思わず聞いてしまう。

この姉のまじめな所はいまいち見たことがないので
「真面目だよ!! これを見てから言つてよ!!」

そういうと姉はメモを取り出した。

殴り書きでいろいろ書いてあるが……

・リアルストリートファイト

・痩せ我慢 お灸バトルロイヤル

・黒ひげ危機一髪 黒ひげⅡ早苗

・私の作った料理 早食い競争

・かくれんぼ de コロシウム ……他

「どこがまじめですか!!」

思わずお姉ちゃんを怒鳴りつける。

書いてあることが意味分らない。

「神奈子先輩もそう思いますよね?」

神奈子先輩も難しそうな顔をしているので聞いてみる。

「うゝん 諏訪子の作った料理は無理だな」

そこかい!!

と思わず突っ込みを入れたくなってしまう。

しかし、よくよく思い出すとお姉ちゃんの料理は死ぬほどまずい。

というかヤバイ。

今思い出しただけでも吐き気がしてくる。

しかし、穰子先輩だけはわらいながら、

「でも、かくれんぼだけはいける気がするんですが」

という。

確かにそうかもしれない。

ただ、不安なのでお姉ちゃんにルールを聞いてみる。

「この、かくれんぼ de コロシウムってルールは?」

「よくぞ聞いてくれました それはね、見つけられても

本部にいる人に知らせる前に相手を倒せばセーフになるという……」

「できるか!!」

この姉はバトルが大好きなのである。

しかし、姉は口を開く。

「じゃあさ、服にシルミみたいな付けててそれを取られるまでは逃げれるっていうのわ？」

「それはいいかも」

穰子先輩が言う。

しかし、私は思う。

早「いいとは思っけどさ……誰が隠れるの？」

諏「そりゃ決まってるよ 生徒会と各部の部長」

早「つかまえたときの特典は？」

諏「特典？」

早「そりゃそうでしょ？ 特典もなきゃみんなやらないって」

穰「なんか買う？」

静「そんなに予算はないわ」

一同「うーん」

なかなか、いい案が決まりそうにない。

みんながしずまった中、神奈子先輩が口を開く。

神「捕まった人が何か聞いてあげればいいんじゃない？」

諏「というと？」

神「自分にできる範囲のことさ それなら予算もないでしょ？」

諏「じゃあさ、メイド服着てって言われたら？」

神「そのぐらいなら聞くわよ」

諏「1日デートとかは？」

神「余裕ね」

穰「パフェが食いたい」

神「関係がない」

…… 1日デートがOK

だったらと思って私は聞いてしまう。

早「キ、クス、とか言われましたら……」

神奈子先輩は顔を赤らめる。

「む、無理よ！！ そんなの……常識的に考えて！！」

……流石に期待しすぎたな。

1日デートがOKぐらいのあたりでいけるかと思ったが……
「すいません」

聞いた自分も恥ずかしかったので謝っておいた。

「私なら許すけどな」

姉はそんな事を言っているがどうでもいい。

「ま、いいや 意見がまとまりそうなので、
かくれんぼ兼鬼ごっこみたいなもので」

どうやら、意見はまとまったようだ。

「じゃあ、あとあと役割は考えるから今日はいさーん
これから1週間は放課後集合ね。」

「おつかれさまでした」

ということと、今日の生徒会は終了した。

しかし、私は必要だったのだろうか？

「早苗」

突然神奈子先輩が名前を呼ぶ。

「一緒に帰ろっか」

「はい！！」

正直子のためだけにここにいる気がする。

私と神奈子先輩はみんなより一足早く生徒会室を出た……

「いい感じですね あの二人」

静葉が諏訪子に言う

「まあね」

しかし、穰子がいう

「でも、神奈子先輩って誰にもあんな感じですよね？」

「始めわね でも、ここからはあの子進展遅いよ」

「……なんとなくわかります」

「だってあの子　天然ジゴロだけどヘタレだから」

……厄介なお人

今は、夕方ちよつと前ぐらいの時間。

神奈子先輩と帰るのにはいまだになれない。

とういか、射命丸先輩は密かに会えといわれていたが、どうどうすぎる……

今日も多少周りからの視線が痛かったし……

私はこれから大丈夫なのだろうか？

「どうしたの　早苗？　悩み事してる？」

「えー！？　そんなことないですよ」

「……私の取り巻きの人たちのこと、心配してる？」

「……」

ずばり、言い当てられた。

「……よく、わかりましたね……なんとなくですけど、不安です」

「……」

私がちよつとしんみりすると、神奈子先輩は私の前にたつてくるつと振り返った。

ちよつと夕日がバックになっている姿は、まるでルビーのようだ……

「安心して　早苗」

もしも彼女たちに何かされたら私に言えばいいわ
いつでも、力になってあげるから」

「……ハイ……」

やっぱりこの人は素敵な人だ。

私なんかのためにそこまで言ってくれるなんて……

私はますます神奈子先輩が好きになってしまうではないか……

私と神奈子先輩はその後他愛もない会話を、

続けながら下校していった。

そのときは、まさか途中で話した、
新歓パーティーの事を盗み聞きした生徒がいるなんて思いもしなかった。

そんなことも知らず、私と神奈子先輩は夕日の出ている
帰り道をゆつくりと歩いていた……

今は、夕方ちよつと前ぐらいの時間。

神奈子先輩と帰るのにはいまだになれない。

とういか、射命丸先輩は密かに会えといわれていたが、どうどうす
ぎる……

今日も多少周りからの視線が痛かったし……

私はこれから大丈夫なのだろうか？

「どうしたの 早苗？ 悩み事してる？」

「えー？ そんなことないですよ」

「……私の取り巻きの人たちのこと、心配してる？」

「……」

ずばり、言い当てられた。

「……よく、わかりましたね……なんとなくですけど、不安です」

「……」

私がちよつとしんみりすると、神奈子先輩は私の前にたつて
くるつと振り返った。

ちよつと夕日がバツクになっている姿は、まるでルビーのようだ……

「安心して 早苗」

もしも彼女たちに何かされたら私に言えばいいわ
いつでも、力になってあげるから」

「……ハイ!!」

やっぱりこの人は素敵な人だ。

私なんかのためにそこまで言ってくれるなんて……

私はますます神奈子先輩が好きになってしまっではないか……

私と神奈子先輩はその後も他愛もない会話を、
続けながら下校していった。

そのときは、まさか途中で話した、
新歓パーティーの事を盗み聞きした生徒がいるなんて思いもしなか
った。

そんなことも知らず、私と神奈子先輩は夕日の出ている
帰り道をゆっくりと歩いていた……

計画 新歓パーティー（後書き）

ぐだぐだと

八坂神奈子捕獲計画 前篇（前書き）

諏訪子をおかつこよくしすぎたかも

八坂神奈子捕獲計画 前篇

初の生徒会会議から3日間が過ぎたが、
なにも特に異変はなかった。

やはり、いくら神奈子先輩といっても女子高生である。

その取り巻きたちが何かできるわけでもない……と思っていたところでした。

今朝だつて朝家でたらいきなりカラスにたかられて、黒猫が通り過ぎて、

途中の道を霊柩車が通つていったぐらいで他には何にもなかったのに……

授業も終わりに昼休みを迎えたところ、私、東風谷早苗は売店の方へ歩いていました。

うつかり、お弁当を忘れてしまったので、パンぐらい買いたくて歩いていたのですが……

「あなた、東風谷さんよね？」

「え？ あ、ハイ……そうですね」

振り向くとそこには見知らぬ顔の人がいた。

でも、どこか見覚えもある気がする……

「よかった ちょっとこっちに来て!!」

「え!？」

その人は私の手を引っ張ると、かなり無理やりに私をどこかに連れ去っていった……

無理やり引つ張られていくと、校舎の裏側についた。

そこには、かなり多くの生徒たちがいて私に対してにらんでいるように……

その視線をみて、私は思い出したこの人たちはきつと……取り巻きの人たちだ……

「こんにちは 東風谷さん 私たちがなんで呼びだしたか分かる？」
心当たりは一つしかない……

「神奈子先輩との事ですか……？」

「せいはい」

やはりだ、まさかほんとにこんなことが起こるなんて……

「じゃあ、要件を言わせてもらっわ 私たち、あんたのことが気に食わない……！」

「……」

予想通り……射命丸先輩からも忠告は受けてたし……

「あの人わね、特別な方なの あんたみたいな人が付き合えるわけもない」

「それを、べたべたとつきまっとして」

「迷惑だと思わない？」

「……」

正論を言ってるつもりですか？

わたし、意外と負けず嫌いな所あるし、口論なら姉以外には勝てると思いますよ？

「あなたたちこそ、迷惑なんじゃないですか？」

「なんですって……！」

私は、相手をあおる。だって、はたから見たらあっちの方が絶対に迷惑。

「それに、私と登下校を一緒にしたいって言ってこられたのは神奈子先輩の方ですし、

生徒会の仕事を手伝ってほしいって言ったのだって神奈子先輩の方ですよ？」

嘘はついていない。これだけ言っておけば私の勝ちだろう。

奴らが直接神奈子先輩に確認しに行けば絶対に神奈子先輩も、イエスの反応を示してくれるだろう……

向こうの方からも、反応がないので私は立ち去ろうと思った時

「待ちなさい!!」

……まだ、続けるつもりですか？ 無駄なあがきですよ？

っと思っていた時、次の言葉に私は、度肝を抜かれた。「じゃあ、私たちが八坂お姉さまにあの子とは一緒にいないで下さいって、お願いしたらどうする？」

「!!」

「知っているのよ、次の新歓パーティー ゲームをやるんでしょ？ かくれんぼか鬼ごっこか分からないけどそんなようなこと」

だいたい、この人たちの言いたい事には察しが付く。

「つまり、そこで神奈子先輩を捕まえて、私と一緒にいないようにお願いすると？」

「察しがいいわね」

やはり、そういうことか…… でも、なぜそんなまどろっこしい方法を？

「私たちもね、ここであんたの体に教え込んでもいいんだけど」

「それじゃあ、八坂お姉さまは悲しむし、あんたが八坂お姉さまにもしちくつたら、

取り返しのつかないことになるでしょ？」

「そこでね、この方法に出たの あんたは知らないかもだけど、

あの人は大のお祭り好きだからね 正攻法で乗っ取ればきっとOKしてくれるわ」

「それに、新歓パーティーには2、3年も自由参加だし、1年生にだってすでに、

あの方のファンはいるわ」

「当日までに何人集まるかは知らないけど、覚悟しておくことね!!」

……どうしてそこまでするのだろう？

私には、全く分からない……

「あなたたちは、神奈子先輩の事をどう思っているの？」

私は聞いてみる……付き合いたいなら言えばいいし、

そうでないならなんでかよく分からないから……

「八坂様のこと？ そんな付き合えるとかなんて全く思っていないわよ？」

……ならどう思っているのか？

「八坂様はあくまで私たちの憧れなの　どんなに頑張っても決して届くことのない、

憧れの対象」

「そりゃ、私たちだっていつも告白じみた事をやっているわ
叶うわけもないのにね」

……私の中の何かがぶちぎれるような音がした。

こいつら、神奈子先輩をなんだと思ってるやがる！！

私は叫んだ！！

「つまり、神奈子先輩に取り巻くのは、お遊びの延長みたいなもので勝手に自分たちが悲劇のヒロインになったような気がしたいだけでしょう！！

本気でもなんでもないんなら、そんなことしないで！！」

「何好きかって言って……」

「私は、本気よ！！　本気で神奈子先輩のことが好きだから！！

あなたたちなんかには絶対負けないわ！！」

「1年生のくせに生意気言って！！」

取り巻きの一人が私を殴ろうとする。

別にちよつと殴られるくらいならいい。

私もそう思っただけ受けそうになった瞬間、なにかが凄い速さできて、
取り巻きの腕を一瞬にして抑えた。

「私の妹が何か失礼したかな？」

そこに立っていたのは、私の親戚の姉こそ、洩矢　諏訪子だった……

「も、洩矢会長!!」

取り巻きたちが一瞬にして慌てだす。

いつもと違って取り巻きたちに睨みを利かすその姿はどこかカッコ良かった……

「ち、違うんです!! 洩矢会長!! この子があんまりにも生意気をいうから……」

「そっか じゃあ、こゝれはなゝにゝかゝな?」

陽気な口調でそういうと、姉は携帯電話を取り出した。

姉は何やら、ボタンを押すと今までの会話がすべて携帯から流れ出した。「いや 私前の携帯壊しちゃってね うちの工学会に頼んで

修理してもらったらムービーの録画機能が格段にアップしちゃってね」

よくみると、かなり鮮明に映像の方も流れている。

しかし、高画質だ。市販の携帯じゃまずあり得ない。

「このムービーを神奈子に見せたらどうなると思う?」

「!!」

取り巻きたちは一瞬にして黙る。

そんなことされたらどう考えても困る。

「うちの妹が失礼なのは申し訳ないけどさ、

自分たちで正攻法とか提案しといてここで手をあげるっていうのはどうかとね」

「違うんです!! 会長!!」

「言い訳…… まだする気?」

私も含め誰もしゃべられなくなってしまう……これが、本当に私の姉?

「私はね、真つ向勝負してくるつもりならこんなことは言わないそれに自分たちから提案したんならやりとおすべきだと思わない?」

「……」
「分かったら、ここから立ち去りなさい」

そういうと、取り巻きたちはしおらしく立ち去っていく。

私は、はじめて姉の姉らしい所を見た気がした……

「早苗」

「は、はい」

姉は私に声をかける。

「あなた、あの勝負……受ける気ある？」

「新歓パーティーのですか？」

「そう」

……どうだろう？

百人位向こうがいたらこれは勝負になるのだろうか？

こっちは一人つきりなんだし、勝てる見込みはあるのだろうか？

私が黙っていると姉は携帯のボタンを押した。

『私は、本気よ！！ 本気で神奈子先輩のことが好きだから！！

あなたたちなんかに絶対負けないわ！！』

……！！

さっきの私の言葉だ……

「この言葉は嘘？ なら、あなたにも神奈子のそばにいる資格なんてないわ」

……その通りだ この勝負、乗らなかつたら私も奴らときつと同じだ……

そもそも、これはよく考えれば真つ向勝負でも何でもない。

つまり、何が何でも勝てばいいのだ！！

「やります」

「やるだけ？」

「違います！！ 絶対に勝ちます！！ どんな手を使ってでも！！」

私は姉に向かってさういう。

この気持ちに嘘はない！！

姉は、さっきからのマジな雰囲気からとつさに、

いつものふざけた姉の雰囲気に戻った。

「よく言った！！ それでこそ私の妹だ！！」

そういいながら私に抱きついてくる姉は、本当にいつもの姉だった。私はなんだか全身から緊張が抜けリラックスしてきた瞬間、前方がかすんでくる感じがした。

私は泣いていたのだ。

すごく、怖かったのだ……

言葉にならない声をあげて泣きじゃくる私を姉は優しく抱きしめてくれた。

この感覚はきつと忘れないだろう。

昼休みも終わってしまったが、今はまだ、こうしていたい気分だった……

結局5時間目途中まで落ち着けなかった私は姉と一緒にいた。

私が落ち着くと、姉はそろそろ教室に戻るように言ってきた。

姉に礼を言う。姉はいいよ、そんなことと言ったが私は、感謝の気持ちでいっぱいだった。

しかし、姉が言う。

「でも、ここで満足しちゃいけないよ？」

勝負に勝たなきゃいけないから」

「うん……」

「私もさ、役立ちそうな人呼んでくるから、明日から計画を練ろう？」

「計画？」

「うん 八坂神奈子捕獲計画」

……そんな事をする必要あるのだろうか？

しかし、相手は神奈子先輩だ。

あるかもしれない。

「分かりました」

私はそういった。

「妹の恋は成就させないとね!!」

「……」

そう言えば思い出した。

私は、絶対に言っておかないといけないことが……

「さっきのムービー……消してね？」

「ダメ」

やはり、姉はあいかわらずの姉だったのかもしれない……

今日も神奈子先輩をげた箱の所で待つ。

今日はあることもあったせいか、いつもの取り巻きたちが全然見当たらない。

なので、私は神奈子先輩のげた箱の前まで行った。

すると、いつものように神奈子先輩はやってきたのだった。

「おまたせ 早苗」

「はい、神奈子先輩」

やっぱり、この人見ると私はドキドキしてしまう。

やっぱり、私は本気で好きなんだ……この人のことが……

「早苗 顔が赤いわよ？」

すると、神奈子先輩は私の顔に触れてくる。

この人は、わざとやっているのだろうか？

「……ッ!!」

「熱はなさそうね」

……真顔でそういうところ、この人は超鈍感なのではないのだろうか？

「変なの」

それだけを笑いながら言うと、神奈子先輩はげた箱を開けた。

その瞬間に神奈子先輩はげた箱からあふれ出る何かを手で押さえる。

神奈子先輩の抑えているものの正体は、手紙だった……

いわゆる、ラブレターというやつだろう……

その量に私が驚いていると、神奈子先輩は私の方を見て言う。

「早苗」

「は、はい」

「これ、捨てるの手伝って……」

そうすると、神奈子先輩はゴミ箱の方へ歩いていった。

そして、開封もしないまま、手紙をすべて捨ててしまう。

「開けもしないんですね」

すると、神奈子先輩は言う。

「だって、こんな事をしてくるってことは私と、友達とか親友とか

……

そういうのとはまた違った一歩踏み出した関係になりたいってこと
でしょ？」

「そうですね……」

神奈子先輩の言い方には少し、苛立ちの様な感情が交じっている。

「中には一度もしゃべったことのない子だっている

いいえ、多分ほとんどがそう　その子たちが私に何か求めようとし
ても

私は無責任にその子たちを受け止めることなんてできないわ……」

「……」

私には神奈子先輩のようなルックスもなければ人気もないので、
具体的なことはわからない。

「辛い……」

「……！！」

神奈子先輩は誰にも聞こえないような小さな声でいったようだが、
私はしっかりと聞こえていた。

何か言葉をかけた方がいいのかもしれないが思い浮かばない……

しかし、神奈子先輩は顔をあげると笑顔に戻りいう。

「ってこんな話してしんみりしても仕方がないわね

早苗　早く終わらせて生徒会にいこ？」

いつものような笑顔に戻る神奈子先輩。

しかし、私には分かってしまう。

彼女は……本当は弱い人間なんだと。

私は、思い切って神奈子先輩に言う。

「神奈子先輩」

「？なに？」

「私、捕まえて見せます 新歓パーティーのゲームで」

「どうしたの？ 早苗？」

「そうしたら、私の願い……聞いてくださいね？」

すると、神奈子先輩は少し驚いたような表情を見せたが、すぐいつもの笑顔に戻るところいう。

「フフツ、いいわよ 早苗 もし捕まえられたら何でも聞いてあげるでも、やるからには真剣に私は逃げるわよ？」

「もちろんです」

……そうでなければ盛り上がらない。

馴れ合いのまま捕まえては意味がないのだ。

「楽しみにしてるわ」

そういうと神奈子先輩は歩き始めた。

私もそのあとをついて行く。

神奈子先輩の姿を見て思う。

私は、二つのものに勝たなければいけないのだ。

一つは、神奈子先輩のことを何も理解してない取り巻きたちとの勝負。

もう一つは、この、鈍感さんに自分の気持ちを理解してもらわないといけない。

私、東風谷早苗は燃え上がる。

この勝負だけは絶対に負けられない。

そして、私が神奈子先輩を振り向かせるのだから……

八坂神奈子捕獲計画 前篇（後書き）

にとりを次で出す

八坂神奈子捕獲計画（前書き）

なげー

八坂神奈子捕獲計画

「今日はちよつと私予定があるので一緒にできません」

「そう 分かったわ」

私、東風谷早苗は神奈子先輩に朝、別れ際にそういった。
なぜなら、今日はうちの姉と放課後集まって、

パーティーでの作戦を練らないといけないからである。

神奈子先輩もまさか、自分を捕まえるための作戦会議をされている
とは、

思ってもないだろうが……

「お願い！！ 桜ちゃん！！ 雛ちゃん！！

今日の放課後私と付き合って！！」

今は休み時間。

私は一人でも多くの協力が欲しいので二人に相談している。

桜「どうしたの？ 早苗ちゃん」

雛「要件を言え」

二人はそう言ってくる。

早「あのね、3日後新歓パーティーがあるでしょ？

そのことでね、どうしても二人の協力が必要なの！！」

雛「なぜ？」

早「じつは、かくかくしかじか……」

私は、とりあえず要件をすべて話した。

すると二人とも、どうやら納得してくれたようで

雛「面白そうだからやってあげる」

桜「私も行くよ」

と言ってくれた。

二人が参加してくれたのは大きかもしれない。

私は二人にいう。

「ありがとう！！　じゃあ、集合は今日の放課後　第一グラウンドだから

あと、体操服できてつてお姉ちゃん言つてた」

二人とも分かったと言つてくれたのでよかった。

幸先のいいスタートをきることができた。

放課後になり私と雛ちゃんと桜ちゃんはグラウンドに向かう。

するとグラウンドにはすでに、お姉ちゃんと、

なぜか射命丸先輩ともう一人小柄な人がいた。

多分、お姉ちゃんが集めると言つていた、役に立つメンツだろう。

「あ、早苗！！　ちよつときて！！」

早苗が近づいていくと、お姉ちゃんと言う。

「早苗も友達連れてきたんだ」

「うん」

「じゃあどうする？　自己紹介からでも始める？」

「うん」

自己紹介ということになったので私は振り返ると、

そこにはすでに赤面した桜ちゃんがいた。

「あ、文先輩もここに！？」

「うん、呼ばれた」

そうだった。

桜ちゃんは、射命丸先輩のことが好きだったんだ……

諏「へえー　けつこ知り合いが多いみたいだね　でも知らない人もいるから

自己紹介しようか　私は洩矢　諏訪子　３年生で生徒会長やってい
るよ　諏訪子ってよんでね」

桜・雛「よ、よろしく願いします」

文「私ってみんな知ってるわよね？ まあ、いいか
私は射命丸 文 2年で新聞部部長をやっているわ」

早「よろしく願いします」

順番的いくと次はこの、小柄な人だが……

？「あ、私？ 私は2年生の河城 にとりだよ 工学研究会会長
をやっているよ」

何となく頼りない感じがすが……この人もすごい人なのかな？
しかし、桜ちゃんなんか驚いている。

桜「あれが、河城先輩！！ あの、天才発明家の……」

早「天才発明家？」

桜「うん、工学分野にとっても優れていて、

あの年にして自分の発明作品の展示会をやったことがあるんだって」
早「……」

流石に姉の呼んでくる人たちだ……只者ではない……

に「私も呼ばれたからにはがんばるよー あと呼ぶときはにとりで
いいよ」

なんか、そう聞くと急に頼もしくなってきたような気が……

諏「じゃあさ、次は1年生たちお願い」

雛「1年生 鍵山雛です よろしく願いします」

桜「同じく1年生犬走 桜です！！ よろしく願いします……」

諏「初々しくていいねー それじゃあ、今日の主役、

恋する乙女スイーツ（笑）早苗お願い」

早「だ・か・ら 誰がスイーツ（笑）ですか……」

あと、みんなの前で恥ずかしいこと言わないで下さい……」

諏「ごめんごめん」

ハハハッ、と笑っているその姿はどう考えても反省してはいないが、

早「全く…… 1年生の東風谷 早苗です

今日は私のために集まってくれてありがとうございます
精一杯頑張るのでよろしく願いします」

これで、全員の自己紹介は終わった。
すると、姉がさっそく本題に入る。

諏「よし、それじゃあ、今日やつてもらうことをいうね

文ちゃん 説明お願い!!」

文「私に丸投げですか……まあ、いいですけど

今日から3日間 放課後に集合して八坂先輩を捕まえる計画を練っていきます

そのために私もここにお呼ばれ（本当はおどされて）きました
そこですね、これからは、諏訪子会長を八坂先輩にみたてて、
実際にやってみようと思います。」

早「お姉ちゃんを?」

文「そうです 八坂先輩とおなじぐらいの人と言ったら、
この人ぐらいじゃないと思ったので」

諏「そうゆうこと ほら、それに私も当日は逃げる側だし、

一緒には参加できないからさ」

まあ、確かにそうかもしれない。

しかし、こんな姉を使って訓練になるのだろうか?

しかもそういえば、

雛「文先輩とにとり先輩も逃げてでは」

に「私は参加しないよー みんなに役立つ発明品作ってあげるだけ
だよー」

桜「じゃあ、文先輩はどうするんですか?」

文「私? そーだなー……あ、じゃあさ、桜が捕まえてよ! そっ
こーで」

桜「私ですか!?!」

桜ちゃんの顔が凄く赤くなる。

それを見て文先輩がニヤつく。

どうやら、この人は桜ちゃんの気持ちには気づいているらしい……
鈍感な神奈子先輩も困るけど、鋭い人も嫌な気がするな……・

文「なに? 桜? いやなの? 私捕まえることが……」

桜「そ、そんなことはないです!!」

……このひと、見事に遊んでますけど……

諏「それじゃあさ、当日のルールを説明するよ
かくれんぼってことにはなっているけどさ、それは実際はじめてだけで、

見つけたあとにね、こんな星が肩に貼ってあるからねこれを取れたら勝ちなんだ」

すると、姉は手のひらサイズの星を取り出す。

諏「結構丈夫に貼るからね　ちよつとぐらいじゃとれないよ」
確かに、丈夫そうに貼っている。

諏「それじゃあさ、時間もないしそろそろ始めよつか
当日の制限時間は15分しかないから気を付けてよ?

それと、今日はグラウンドでしかやらないけど当日は学校の敷地全部が範囲だから」

姉はそういうとみんなと少し距離を開ける。

諏「それじゃあ、はじめ!!」

私は最も勢いよく追いかけてようとしたが、そこを文先輩に止められてしまった。

早「どうしたんですか?　早く捕まえないと」

文「甘いわね　早苗ちゃん」

早「なにがですか?」

雛「……作戦が必要」

文「そういうこと、流石雛ね」

雛「それほどでもない」

早「そうですか?　私の姉ですよ?　そんな必要ないと思いますけど?」

に「実際にやってみればいいと思うよ」　私は見てるからー」

文「そうね　はじめはあの方の恐ろしさを分かったほうがいいと思うわ」

そついうと、私たちは姉にめがけて走り始めた。

私は、足にそこまでの自信はないが多少は速い部類の人間に入ると思った。

しかし、文先輩と椀ちゃんは速度が違った。

あの二人の速さは、まるで風だった……

諏「お、来たか……」

文「行くよ椀!!」

椀「はい!! 先輩!!」

かなりの速さで2人が姉に突っ込む。

常人なら反応すらできないであろう。

しかし、姉はまるで流れる流水の如く、二人の突撃をよける。

その姿はまるで踊っているかのようなだった……

しかし、すかさず私は星をとりに行く。

だが、それも簡単にかわされてしまう。

さらに、雛ちゃんもそこに飛びつくが流されてくるくる回ってしまふ。

諏「準備運動にすらならないけど」

姉はその後、減らず口を叩きながら逃げ回っていたが、

みんながばててしまってもとうとう星を取ることはできなかった……

やはり、姉はすごい人物だったみたいだ……

みんなばててるのに一人だけまだ動いている。

早「私、お姉ちゃんをなめてました……」

文「……そうでしょ」

椀「化けものです……」

雛「……」

に「全然ダメダメだよ」

かろうじて話せるみんなをよそに、にとり先輩は軽々しくいう。

正直腹が立つ。見てるだけで何にもしてないでしようが……

しかし、手にはいろいろな道具を持っていた。

に「でも、いろいろ有効そうな発明品はあったから持ってきたよ」
それにしても、どれも怪しい……

早「でも、誰か作戦とか分かるんですか？」

雛「私がやる」

早「え！ できるの？」

雛「もちろん よくゲームやるし」

早「大丈夫？」

文「私たちが考えるよりはいいと思うわよ」

桜「そうですねよ 早苗ちゃん 雛ちゃん頭いいんですから」

早「そうなんだ……」

雛「ということで何個か思いついたんですが」

雛ちゃんの説明を聞いたがたしかに筋が通っていて、
いい作戦がいくつもあった。

その後は、みんなでその作戦を試してみたのだが、
結局姉を捕まえることはできなかった……

そのころ、生徒会室では

「静葉、穰子、あなたたち諏訪子知らない？」

二人とも首を横に振る。

神奈子は頭を抱えてしまう。

「はあ、今日から本格的な準備だっていうのに……」
自由すぎる生徒会長に悩んでいる 神奈子がいた……

二日目になっても結局姉は捕まらない。

なぜだろう？

普通は捕まってもいいと思うのに……

なぜ、捕まえられないんだろう？

早「結局捕まえられませんでしたね……」

文「仕方ないよ……化けものだもん」

椛「文先輩なんて、学校一足速いですが……」

雛「……八坂先輩は、洩矢先輩以下ってことはないんですか」
確かにそうだ。

認めたくはないが、あの姉が凄すぎるんじゃないのだろうか？うちの姉の身長は145センチ 対する神奈子先輩は176センチ（文調べ）

そう考えると、小回りの利く姉の方が有利に見える

文「そうねえ、ありうるかもしれないけど多分同等よ？」

早「そうですか……」

多分文先輩が言うからには間違いないんだろうが……

文「それにね、八坂先輩にはね、不思議な力があるの」

早「……ちから？」

文「うん 彼女は風が操れる」

早「……」

この人は何を言ってるんだろうか？

と思いたくなるが誰も突っ込もうとはしない。

なぜなら、あの人なら操れそうな気がするからだ。

文「あの人は、たまに見せるの、それを 見なきゃ分からないでしょうが……」

そこであの人についた二つ名は風神様よ」

雛「……なんか、かつこいい」

椛「ほんとなんですか？」

文「ほんとよ、それに私が嘘ついたことある？ 椛」

…… けっこうありそうな気がするが放っておこう。

とにかく、今はこの状況を打開しなければならぬ。

早「にとり先輩もなんかいいんですか？」

さつきから黙って立っているが、真剣な顔になると言い始めた。

に「みんなは何でそんな真剣にやるの？こんな事を」

早「それは、私の為にやってくれているんですよね？」

に「そう、そこがいけないんだと思うな」

早「？」

にとりの雰囲気は何かいつもと違う。

に「きつとね、みんながね、この状況を楽しめればいいと思うの」「何を言っているのだろうか？

に「要するにね、みんながね、早苗ちゃんの為とか思うんじゃない？あの目標を捕まえることだけを意識すればいいんじゃない？」

文「というと？」

に「作戦やさ、道具だって重要だと思うよ。私も役に立ちたいし、でもね、最終的なことを言えばやっぱり、覚悟の問題なんじゃない？死ぬ物狂いでさ、一つの目標を目指せばいいんじゃない？

敵はさ、とても強いんでしょ？　ならさ、そこだけに集中しないと」
雛「……がむしゃらさが足りない」と？

に「そういうこと」

一同は振り返ってみる。

心の中にあきらめがあったのではないのか？

くだらない、プライドがあったのではないのか？

もう一度、自分を振り返る。

そうだ、私は東風谷早苗。

私は、どんな手段を使っても勝たなければいけないのだ！！

早「……わかりました　明日はどんなことがあっても捕まえましょう
どんなに汚くてもいいから」

に「そういうこと、しかも当日は取り巻きたちとも戦うんだよ？

どうしても勝たなきゃいけない勝負はね、とにかく勝たなきゃ」

みんなを見る。

すると、みんなもどうやら吹っ切れたようだ。

この様子なら明日は絶対に捕まえられる。

に「だからさ、このとりもち弾を……」

一同「それはいいです！！」

単なるマッドサイエンティストに思えてきた……

その頃、神奈子は一人下校していた。
最近早苗と毎日下校していたのでさびしい気がする。
その、さびしさが愛しさだということには、到底気づきそうにもなかった……

今日は最終日。

みんなの気持ちが昨日とは違う。

私自身もそうだし、みんなからも感じられる。

姉にもそのことは、伝わっているようだ。

いつもよりも、姉の体勢が崩れている。

そして、なにより真剣である。

その様子を外からみる、運動部にとっては異様なものだった……

諏「今日はやるじゃん！！ いつも、退屈だったのよね！！」

まだ駄目だ。姉には余裕が少し見られる。

しかし、徐々に余裕がなくなってきたている気がする。

文先輩と桜ちゃんが思い切って手を伸ばす。

すると、星に少し触ることができる。

諏「おっと」

おしい所まで来ている。

あと少しで取れそうだ。

姉が体勢を直そうと少し下を向いたとき、

雛ちゃんが照明弾を放った。

いままで、引つかかったことのなかった照明弾であったが、

流石に、姉も引つかかる。

諏「く……」

多少だが視力を奪われる姉、
姉が後ろに下がるうとした時だった。

私は思いっきり姉に飛びつく。

すると、私と姉はぶつかって互いにこけてしまった。

私はしばらく立ち上がれなかったが、自分の手を確認すると、

確かにそこには星があった。

私たちは、ついに姉から星を奪うことができたのだ。

お姉ちゃんが倒れたままだがいう。

「いやー、まいったまいった 流石だね！！みんな」

私たちは喜び合うつもりだった。

だが、限界寸前までうごいていた私たちはみんな力なく倒れてしまった。

に「みんな寝ちゃいましたね」

諏「仕方ないよ」

文「私は…… かるうじて」

に「でも、どうします？」

文「私は桜も雛も家は近くだけど……」

に「なら、私も近くだ 運ぶの手伝うよ」

文「早苗ちゃんはどうします？」

諏「残念だけど私の今の体力じゃ無理だ誰かわりがいれば……ん？」

諏訪子の目には、一人誰かが近寄ってくるのが見えた。

その、美貌は間違えるはずもない…… 神奈子だった。

神「諏訪子！！ 生徒会サボって！！なにしてたの！！」

しかし、諏訪子にそんなことは聞こえていない。

諏「あー神奈子 ちょうど良かった 早苗を連れて帰って」

神「え？」

下の方を見ると早苗が心地よさそうに眠っているのが見えた……よく見るとみんなボロボロである。

なんとなくなだが、加奈子にも察しはついた。

神「仕方ないわね……諏訪子　ついてきてくれる？早苗のうち案内してね」

諏「分かった」

それだけ言うともみんなは別れて動き始めた。

柊と雛はにとり開発の特製電動アシスト付きリアカーに乗せられて、早苗は神奈子におぶってもらって帰ることになった。

諏訪子と眠った早苗と神奈子は歩いていると、

諏訪子は口を開いた。

「明日は、どうする気？」

しばらく神奈子は黙っていたが口を開く。

「早苗がここまで頑張ってくれたからにはね

明日は真剣に逃げるよ」

「そう、ならよかった」

諏訪子はほっとしたような顔をする。

相変わらず、この人は厄介者だ……

すると、後ろの早苗が寝言を言うのが聞こえた。

「神奈子先輩……絶対捕まえます」

二人ともびっくりして後ろを振り返った。

しかし、すぐに顔がゆるむ。

「そうね、しっかりと捕まえてね」

神奈子はやさすようにそう言った。

すっかり暗くなったあたりでは、

その上空に星空が広がっていた……

後日談であるが、神奈子を見た早苗の母親は、

あまりの美しさに早苗に嫁いでほしいと思ったとか……

八坂神奈子捕獲計画（後書き）

ちよーぐだぐだ

完結！！ 八坂神奈子捕獲計画（前書き）

なげー

完結！！ 八坂神奈子捕獲計画

とうとう、新歓パーティー当日がやってきた。

この日は実は、日曜日なので一日を通して行うという、意外と大きな行事なのだ。

わたし、東風谷早苗も若干の筋肉痛と共に、会場となっている、大講堂にやってきていた。

この行動は、この学校の中でも相当大きい建物で、全校集会の場でもあるので今日の参加人数ぐらいいならくらく収納ができる。

この日は1年生以外にも、うちの姉や神奈子先輩、または文先輩などの取り巻きも来ていたので例年よりも人数が多いらしい。

そのせいかは知らないが、例年よりも賑やかな分、どこか黒々としたオーラも流れているようだ……

今日の朝は、神奈子先輩とは一緒に来れなかった。なぜなら、昨日の特訓の疲れか、寝坊してしまったから。

神奈子先輩は、朝が早かったらしいので既に待ち合わせ場所にはいなく、

ちよつと残念な登校になってしまった。

私は、誰か知っている人はいないかとあたりをみると、後ろから突然誰かに抱きつかれた……

「あはよう！！ 早苗ちゃん！！」

当然のことで驚いたが振り向いてみると、そこにいた正体は文先輩だった。

「あ、文先輩！！」

「調子はどう？ 早苗ちゃん？」

「少し筋肉痛はありますが、でも逆に何かいつもより走れそうで

す!!」

「そう、よかった 私もなんかそう」

文先輩は安心したといった表情を浮かべる。

ただ、一つ問題がある。

「あの、文先輩？」

「なに？」

「抱きつかないでもらえます？」

まわりからは、文先輩の取り巻き+α（栞ちゃん）の、嫉妬に満ちた視線が送られている……（特にα）

「ああ、ごめんごめん」

そういうと、文先輩は私から離れて、

いつの間にかいた栞ちゃんと雛ちゃんの方へ向かっていった。

「栞、雛、調子は？」

「……私は、大丈夫」

雛ちゃんという。

たしかに、大丈夫そうだ。

「私は、ちよつと足が痛いです……」

栞ちゃんはそういう。

「そう」

すると、文先輩は栞ちゃんの足をさすりだす……

この行動には、周りの人全員が驚愕した。

特になでられている本人が……

「あ、文先輩!!」

「じつとして、栞の足は大切なんだから、走れなきゃ困るでしょう？」

頭からいまにも爆発しそうなくらいの湯気が栞ちゃんから出ている。いや、多分爆発しているんだと思う。

すると、栞ちゃんはいきなり足踏みをしだした……
ものすごい速さだ……

「だ、大丈夫です!! 先輩!! 先輩に触ってもらったら

急に痛みが引きました！！　ハハハハハッ……」

「そう？　なら、ちよつと走ってみたら？」

「そうですよね！！　いつてきまゝす！！」

すると、桜ちゃんは100メートル9秒台ぐらいのペースで走り始める。

あたりにいる人関係なくなぎ倒しながら、どつかに走り去ってしまった……

私は茫然としていたが、すると、雛ちゃんが文先輩に話しかける。

「流石ですね　先輩」

「まあね」

くすくすと笑いながらそういう二人、

私は理解してしまった……この二人……悪魔だ……

桜ちゃんも大変な人を好きになったんだね……

文先輩は突然何かを思い出したかのように胸ポケットを探り始めると、

なにか、豆粒サイズのものを取り出した。

「そうそう、にとりからこれを渡せてね　早苗ちゃんに」

「私にですか？」

「そう、これ　発信器なんだって」

「発信機？」

「あの、取り付けられている人が何処にいるかわかるってやつ、これを八坂先輩に取り付けておけばいつでも発見できるでしょ？」

「そうだ。確かにそうだがなぜ私に……？」

「このなかでさ、八坂先輩とコミュニケーションとれるの早苗ちゃんぐらいしかないし」

「はあ……」

「これもさ、作戦の一つってことで、私はさ、そろそろ部活紹介の準備があるからさ、

行くね　ばいばい」

「あ、ちよつとー！！」

文先輩はそれだけ言うのと立ち去ってしまった。
あの人も結構マイペースな人だから困る。

「はあ」

ため息をわたしはつく。

すると雛ちゃんが私に話しかけてきた。

「早苗」

「なに、雛ちゃん？」

「発信機……どう付けるの？」

「え？ まあ、それは会った時に」

「今日、私たちがあの人に出会えるのは、生徒会紹介と立食パーティーの時だけよ？」

ゲームを除けば」

確かにそうだ、でも何か問題があるのだろうか？

「うん、でも何か問題があるの？」

すると、雛ちゃんはパンフレットを取り出し、ゲームの前の項目に指をさす。

そこには、着替え 5分と書かれていた。

「これって……」

「そう、例え発信機付けたとしても着替えられたらアウトってこと」

……確かにそうだ。しかし、髪の毛とかならどうだろう？

体の一部なら大丈夫なのでは？

「衣服じゃなければいいんじゃない？」

「それはダメだよ あの子超敏感だから」

「……」

何処からともなく声が聞こえる。

なんか聞き覚えのある声。

下の方を見てみると案の定、姉こそ、洩矢諏訪子会長がいた。

「お姉ちゃん！？」

「……おはようございます」

「うん、おはよう 早苗 雛ちゃん」何でここにいるのだろうか？

生徒会はすでに集合のような気がするが……

聞いてみる。

「何でここにいるの？」

「可愛い妹の為だからね」

「……」

まあ、いつも通りだ。

すると、雛ちゃんが突然姉に話しかける。

「洩矢会長」

「ん？」

「あなたが、八坂先輩に発信機を付けてくれませか？」

「もちろん、そのつもりで来たんだから」

そんなことだろうとは思った。

まあ、でも、頼るのは悪くないのかもしれない。

今日一番あの人と一緒にいるのは姉だと思うから。

「はい」

私は姉に発信機を渡す。

ここは姉に託そう。

「そうこなくっちゃ で、何処に付けてほしい？」

確かにつけるだけでは意味がない。

すると雛ちゃんが真顔で何か言いだす。

「八坂先輩は体育の時、下着まで着替えますか？」

「ん？ 着替えないよ いつもしたスパッツ出しあの子」

「ならそこをお願いします」

「ラジャー」

「ちよつと待ったー！！」

真顔で何を言っているんだろうか？

神奈子先輩のスパッツは見てみたいが……

そんな事をじゃない！！

諏「どうしたの早苗？」

雛「……何か問題でも？」

……わたしの周りには変態しかいないのか？

「普通にセクハラまがいでしょ！！ それ」

私の良心に反する気がする……

諏「大丈夫！！ なるべくいやらしくないようにやるから！！」

早「そういう問題じゃなくて！！」

わたしは、とりあえず口答えする。

じゃないと何か行けない気がするからだ……

しかし、そんな私をよそに雛ちゃんはいう。

雛「どんなことしてでも勝つんでしょ？」

早「確かにそうは言ったけど……」

雛「なら、このぐらい仕方がない」

……雛ちゃん、あなた 本当の悪魔ですか？

その後、二人に無理やり押し通された私は、

仕方ないので、了解をしておいた。

姉はもう行かないといけないといい、立ち去ろうとしたが、

念入りにこれだけは言っというた。

「絶対変なことしないでよ！！」

「任せて！！」

あの、任せてが一番信用にならないんだが。「大変なことになったね……」

そういつて、雛ちゃんの方を見ると雛ちゃんは少し、笑っているように見える。

「……楽しんでない？ 雛ちゃん？」

「……ちよつとね」

私は悟った。多分この子が一番の悪魔だ……

その後は、帰ってきた桜ちゃんと雛ちゃんと一緒に部活紹介を見た。神奈子先輩曰く、この日の紹介の評価が部費へと繋がるとかなんや

らで、

どの部活も一生懸命紹介するのだとか。

確かに、どの部の紹介も力が入っていて面白いものだった。

運動部の紹介が終わり、文化部の紹介に入った。

新聞部の紹介になると、ステージには、文先輩が一人だけ立っていた。

やはり、結構ルックスがいいのでステージに立つだけでも歓声が上がる。

軽く桜ちゃんは失神仕掛けだが……

その後、軽く挨拶をすると今まで取り上げてきた新聞を取り出し、どんな内容があるのかを力説した。

中には、文化祭やらなんやら学校行事のほかにも、個人の賞をたたえるだとか、

うちの学校の部が全国行っただとかそんな記事もあったが、

一番多かった記事が、生徒の色恋沙汰とか、交際宣言とかそんなものだらけだった。

いいのか？そんなことやって？

しかし、自由が校風のこの学校だ、多少は問題があっても許されるようだ……

その後も、一連の紹介し終わると、拍手喝采の中、文先輩はステージ袖へと、

下がっていった。

あんな内容で認められるんだから凄いな、ここは……

そんな中、次の紹介はおそらく過去最低評価を受けたのではないのだろうか？

ステージにとり先輩が立つと、歓声がわく。

おそらく、可愛らしいからだと思うが。

歓声が止むとにとり先輩は部の紹介を始めた。

「私は工学研究会 会長の河城にとりだよー

今日は私の自信作の発明を見せるよー」

すると、にとり先輩はなんかかなり大きいロボットのようなものを
持ってくる、

熱く語りだした。

「これぞ、私の自信作！！ エコをテーマに作った作品！！」

その名も全自動ゴミ分別機 『分けちゃうんです！！零式！！』」

なんだか、いやな気しかない……

床にとり先輩はペットボトルを投げる。

すると、そのロボットはペットボトルを拾い見事にキャップと、

ラベルと本体に分けて自身のゴミ収集スペースに入れる。

「このように、この子にはゴミの種類の判別機能と、分別能力を持
っています！！」

ここまでなら素晴らしい発表に思えた。

しかし、ロボットがにとり先輩の後ろに近寄ってゆく。

「ただ、一つ問題があつて……」

そういうとにとり先輩はロボットに持ち上げられてしまう。

「何がごみで何がゴミじゃないか判断できないんです！！」

ぎゃあー たゝすゝけゝてゝー！！」

ほかの部員たちが出てくると、そのままステージ袖へと下がってい
った……

かなり間抜けな姿の発表ではあったが会場は笑いに包まれていた……
運動部に比べてこの学校の文化部（特にさっきの二つ）はおかしい
ような気がするが……

一通り部活紹介が終わると今度は生徒会紹介が始まった。

書記と会計の静葉先輩と穰子先輩の紹介をあっさり終えると、

（印象に残らなかった）ステージには神奈子先輩が出てきた。

あまりの美しさに会場はしばらくしずまりかえる。

すると、神奈子先輩は軽く挨拶をする。

「1年生のみなさん、初めまして 生徒会副会長の八坂神奈子です
素敵な学園生活が送られるように努めますのでよろしく願いしま
す」

そして、一礼しようとした時、会場にいた私と目があってしまった。
すると、神奈子先輩は私にウインクをする。

多分私が一番盛り上がったと思うが、その様子に会場は、
一気に黄色い声援に包まれた。

それは、1年生にもファンクラブができた瞬間だった……

そして、次は生徒会長の紹介であろう。

しかし、姉は何処にもいない。

みんながあたりを見渡すと、スポットライトが講堂のてっぺんをと
らえた。

かなり高い講堂の天井付近に突貫工事の足場を造り、その上に立っ
ていた。

馬鹿は高いところ好きっていうのは一概にも言えないと思う。「
とう!」

そついうと、姉は足場から飛び降りる。

普通、あの高さから飛び降りたらひとたまりもないだろう……
会場が絶叫に包まれる!!

何を考えているのだろうか?死ぬぞ!?

しかし、よく見ると何本かロープがぶら下がっており、それに捕ま
ると、

まるでターザンの如くロープに飛び移りながら高度を落としステ
ジへ向かっていく。

そんなばか丸出しの登場だったが意外と会場は歓声に包まれている。
そして、最後のロープからステージへ飛び乗ると見事な着地を決め
た。

そして、そこから豪快にマイクをつかむと話し始める。

「やつほー みんな!!! 生徒会長の洩矢 諏訪子だよ」
これから、よろしく……ふげっ!!」

突然姉はよろめき始める。

よくみると後ろから神奈子先輩が後ろから姉の頭を叩いていた。
仕方ないだろう。

たぶん、リハーサルでも一回もそんなことやるなんて言っていなかったから……

神奈子先輩が怒鳴る。

「あんた！！何勝手にやってんのよ！！」

「だってえ……」

「だってじゃない！！」

神奈子先輩に怒られている姉を見ると、どう見ても
いたずらっことそれをしかる母親にしか見えない。

そんなこともあってか会場は大爆笑に包まれた。

「全くもう……」

神奈子先輩はそういいながら姉から離れると姉は再びマイクを持
た。

そして、観客席の方に目をやると私を発見しウインクする。

やめる！！ 恥ずかしいと思いつながらも察知する。

もしかして、今から発信機を取り付けるのでは……

目が怪しく輝く。

絶対にそうだ……

突然後ろを振り返ると神奈子先輩に近寄っていく。

そして、何かしゃべりだす。

「せっかく、新入生との初めての紹介だからね 君たちにご褒美を
あげよう！！」

そういうと、思いつきり神奈子先輩のスカートをめくりあげる。

すると、神奈子先輩のスカートの中があらわになってしまう。

会場が大歓声（？）に包まれる。

私も姉に何やってんえん！！と心の中で突っ込みつつも、

つま先立ちになってステージに目をやる。

普段は結構ロングで見ることなどできない神奈子先輩のスカートの

中身だが、

この日はすでに下に体操服のズボンを穿いていた……

会場から残念そうな声（？）が上がる。

めくった本人も残念そうな顔をしている……

しかし、めくられた本人はものすごい顔を真つ赤にしている。

神奈子先輩は結構感じてはいたが超乙女なのだ……

その表情に私も含め周りはハートを射抜かれてしまう。

文先輩はシャッターチャンスと言わんばかりに写真を撮りまくって
いた……

「なんだ、神奈子！！した体操服ならよかったじゃん！！」

姉はそういいながら逃げようとしたが神奈子先輩は、

それを片手で掴むと、今度は逆に瞬間移動して文先輩をとらえた。

「あんたたち二人！！こっちに來なさい！！」

すると神奈子先輩と姉と文先輩はステージ袖へと下がってしまった。

神奈子先輩はかなりご立腹なようだが……

ステージに二人だけ残された秋姉妹がいう。

「え、えーと何か色々ありましたがこれより、立食パーティーに入
りたいと思います。

カフェテリアの方に移動してください！！それでは、みなさん楽し
んでー！！」

二人はかなり投げやりのまま会場を後にした。

こんな調子でいいのだろうか？

だが、作戦は成功していたようだ。

雛ちゃんが持っていた発信機の受信機は動き出したからだ。

パーティーでの休憩をはさんだのち、私たちの本当の勝負が始まる
！！

パーティーはカフェテリアで開かれる。

この学校のカフェテリアは以上にでかい。

校内生協を中心とした方々がこの日の為に、
たくさん料理を作ってくれた。

しかし、私たちはあまり食べない。

ここで食べたら間違いなく、ゲームで死んでしまうからだ……
ゲームに参加するつもりを取り巻きたちも食べる様子は見せていない。

あの人たちも結構マジみたいだった。

早「みんなあんまり食べませんね」

雛「そりやそうでしょ」

桜「ちよつともったいないですね」

しかし、仕方がない。

ここで食べすぎたらすべての作戦はパーだ。

しばらくすると、文先輩とにとり先輩も私たちと合流した。

自作マシンにやられたにとり先輩と、神奈子先輩にこつてり怒られ
たらしい文先輩、

二人ともボロボロだった……

早「大丈夫ですか？」

文「なんとかね」

に「死にそう……」

桜「先輩、あそこで写真撮るのはダメだと思います」

文「分かっているわよ……」

雛「……馬鹿」

に・文「すいません 言われても仕方ないです」

二人とも多少は反省しているようだった。

にとり先輩はともかく、文先輩は反省してもらはなければ……
早「作戦かかっているんですからね？ 特に文先輩」

文「すいません」

まあ、反省してるので許してやろう。

雛「まあ、作戦はうまくいってるから問題はないでしょう」
その通りだ。なんやかんやでうまくはいつている。

みんなもホッとしていると、一人の人が近寄ってきた。

「がんばってるみたいね」

その声は聞き覚えがあった。

前私を呼びだした、取り巻きの人だった。

私は笑顔を作りいう。

早「ええ 神奈子先輩を捕まえるためですから、頑張らずに何かいられませんか」

私は、前と同じようにあおる。

殺伐とした空気があたりを流れる。

「まあ、いいわ こっちは100人近くの大集団 あなたたちなんか勝ち目はないから」

好き勝手言っていればいいと思う。

なんとなく確信できてしまうから、

あなたたちでは神奈子先輩は捕まえないって。

それだけ言つと取り巻きたちは去っていった。

桜ちゃんは多少おびえていたが、他には誰も怯えていなかった。

雛「大丈夫…… 早苗」

文「あいつらなんか敵じゃないでしょ？」

早「はい」

そうだ。

最大の敵は神奈子先輩なんだから……

すると、その最大の敵が私の近くに現れた……

「早苗」

神奈子先輩だ……

早「何でしょうか？」

神「今日のために色々やってきたようね？」

早「ハイ!!」

神「ふふっ、ゲームは楽しみにしてるわ、みなさん」

それだけ言つと神奈子先輩は立ち去っていった。

私はみんなの方を振り返る。

そして言う、

早「みんな、今日は絶対に捕まえよう!!」

みんな黙ってうなずく。

言葉こそないがみんなのやる気は伝わってくる。

しかし、椀が指をさす。

椀「でも、あれはいいんでしょうか？」

早「ん？」

椀の指をさす方向を見ると、

うちの姉と神奈子先輩がものすごい勢いで料理を食べているのが見えた……

諏「残しちゃ勿体ないからね!!」

神「そうね、ちゃんと食べなきゃ」

あきれながら文先輩がいう。

文「まあ、あの人たちは特別だから」

全くその通りだ。

その後も時間いっぱい食べ続けた二人はすでに化け物なのかもしれない……

時間は経過し、着替えの時間に入る。

流石に制服で逃げるわけにもいかないので、みんな体操服のジャージや、

2、3年は部活での衣装などに着替える。

この日、実は一番緊張していた神奈子はすでに体操服を着ていたのだ、

諏訪子の付き添いのためだけに更衣室へやってきたのだ。

諏訪子の着替えに付き添いながら、考える。

早苗以外の人も今日は追いかけてくるだったと。

心配そうな神奈子をみて諏訪子がいう。

「神奈子」

「なに？」

「緊張してる？」

「まあね、」

すると、真剣な顔つきになった諏訪子が神奈子にいう。

「あんたが手を抜いたり、早苗たち以外に捕まったりしたらどうする？」

「……どうするっていったって、

「仮にそんなことがあったらね、あなたを……」

「言わなくていいわ」

神奈子は強制的に諏訪子の言葉をシャットアウトする。

なぜかって、そんなことは絶対起こらないから。

「私がそんなことにならないのは、あんたが一番よく知ってるでしょ？」

神奈子は、自信に充ち溢れた声でそういう。

その声には曇りはない。

「そうね、聞いた私が馬鹿だった」

諏訪子は着替えを終えると同時にそういう。

それは、彼女が八坂神奈子だったからだ。

「着替えも終わったしいつか 神奈子」

「ええ」

そういうと二人は更衣室を後にする。

実は、早苗たち以上に大きな敵と戦わなければならないのは、神奈子の方なのかもしれない……

その頃、早苗たちは最後の作戦の確認をしていた。
とうとう勝負の時がやってきたからだ。

各部の部長たちと生徒会メンバーが集まっている。
秋姉妹たちが、具体的なルールを話している。

ルールは簡単、逃げ手は各部の部長と生徒会、

逃げ手が逃げてから100秒待ってから探し手はスタート。

探し手は逃げ手を見つけても肩につけてる星を取るまでは捕まえられないことにはならない。

捕まった逃げ手は探し手になることができる。

捕まった逃げ手は、捕まえた探し手の言うことを聞かなければならない。

と言うただけだ。制限時間は15分。学園敷地内は全てが逃げ場ということ。

説明を終えると、少し時間が開く。

すると、ゲーム開始のピストルが鳴り響く。

そして、100秒のタイマーがスタートを切ると同時に逃げ手は一斉に逃げていく。

私は、一瞬神奈子先輩と目があつた。

その時に、神奈子先輩は言っているみたいだった。

「私を捕まえてみなさい」と。

私も絶対捕まえると投げ返す。

すると、神奈子先輩たちはあつという間に消えていった。

早「桜ちゃんはすぐに文先輩を捕まえてね」

桜「うん!!」

この作戦のキーマンは桜ちゃんと文先輩だ。

この二人なしには絶対勝てない!!

早「雛ちゃんは見つけてら隙あらば照明弾を!!」

雛「分かってる」

雛ちゃんも重要だ。

なにしろ、ここがいなければ決定的なチャンスはないからだ。

雛「早苗は、最後を頼んだわよ」

早「うん!!」

そつだ、これは私の勝負なんだ。

だったら最後は私がやらなければいけない。

しばらくすると、タイマーの数字が0になりみんなが一斉に飛び出す。勝負が始まった。

本当に入り口近くで待っていた文先輩を桜ちゃんは捕まえる。

これで、メンツはそろった。

いざ、勝負！！

神奈子先輩を見つけるのは簡単だった。

にとり先輩の発信機が場所を示してくれたからだ。

工学研究会部室でさきほどのマシンに扉を警備させているにとり先輩は、

のんきにお茶を飲みながら、学校に設置されているモニターからみんなを覗いている。

「私の力はこれまで、あとはみんなが頑張ってるねー」

神奈子先輩は結構広い学校の校舎前の駐車場にいた。

休日ということで車もなく、障害物はない。

神奈子先輩は多少驚いていた。

神「えらく速いわね……あなたたち」

早「もちろん 作戦ですから」

神「ふーん、それに文ほどのこもいるのね」

文「はい！！」

神奈子先輩はクスリと笑うと、いつもの優しそうな感じではなく、もっと、真剣な迫力のある表情で言う。

神「退屈はしなさそうね、いいわ！ かかってきなさい！！」

そついうと神奈子先輩は逃げるそぶりは特に見せない。

文「行くわよ！！椀！！」

椀「はい！！」

俊足2人が神奈子先輩に突っ込む。

しかし、神奈子先輩はいとも簡単によける。

雛ちゃんも神奈子先輩に突っ込むがよけられてしまう。

雛「なんの！！」

だが、さすがに特技 回転と言うだけのことはあり、
すぐに回転して体勢を直すともう一度突っ込む、

これには、神奈子先輩も多少体勢を崩す。

だが、まだ私の出番ではない。

私は確実な時に行かなければならないから。

文先輩と椀が体制の崩れた神奈子先輩をもう一度襲う。

すると、少し星に触ることができる。

神奈子先輩が星に気を取られた瞬間に、雛ちゃんが照明弾を放つ。

激しい光に神奈子先輩はよろめく。

チャンスは今しかない！！

私は思いっきり突っ込み神奈子先輩に手を伸ばす。

誰もが星を取れたと思った瞬間だった！！

突如激しい風がみんなを襲う！！

一瞬ひるんだ私の隙を全く見逃さず神奈子先輩は私の手をよけてしまっ
った……

しまった。

彼女の二つ名は、風神なのだ……

神「残念ね、いい線いってたと思ったわよ」

神奈子先輩はそういった。

だが、私たちは確信する。

まだ、諦めてはいけない。

「いたわー！！ あそこー！！」

そんななか、とうとう取り巻きたちまで登場してしまった。
めんどくさい状況になってしまう。

邪魔以外の何物でもない。

神「邪魔が入ったわね」

すると、神奈子先輩は走りだす。

そして長い手と足を使うと、壁をよじ登り校舎の二階へ入ってしまった。

私たちはその運動神経に驚愕した。

しかし、なんとなくだがみんな分かっていた。

きつと、あの人はここに戻ってくる。

取り巻きたちはみんな校舎の方へ行ってしまう、

神奈子先輩も戻ってこないまま、残り3分を迎える。

すると、案の定神奈子先輩は帰ってきた。

それも、汗一つかかずに……

神「全員振り払うのは大変だったわ さあ、続きをやりましょう？」

神奈子先輩はそういうとまた、私たちはそれを捕まえようとする。

しかし、一向に捕まりそうにない。

もう、4人で一気に特攻しているのに全くだ。

先ほどの手も読まれてしまい勝機はないように思える。

しかし、着実ではあるが神奈子先輩も息が上がって来ている。

神「いいじゃない！！ でも、なぜそんなに頑張るの！？」

神奈子先輩が聞いてくる。

ゲームに勝つため？

みんなはそうだ。

でも、ごめんね。

私だけは一緒じゃないみたい。私だけは違っちゃったみたい！！

私は思いつきり神奈子先輩に叫ぶ！！

「決まってるじゃないですか！！ 先輩のことが好きだからです！！」

一瞬みんなが止まる。

しかし、神奈子先輩を残してみんなが先に動きだす。

文先輩と桜ちゃんが一斉に飛び込む。

とつさに反応して神奈子先輩はなんとか避けるが、
体勢のブレは激しい。

そこに、雛ちゃんが最後の照明弾を放つ。
すると、とうとう神奈子先輩にしりもちをつかせることに成功した。
この状態なら確実に取れる！！

「ちよつと待ったー！！」

後ろからそんな声が聞こえる。

そこには狙ったかなのように、神奈子先輩の取り巻きの一人が向かってきていた。

ほぼ、私と一直線に並ぶ。

私も負けてられない。

みんなの作ったチャンスだから！！

負けるわけにはいかないのだ！！

しかし、また私たちに向かい突風が吹く。

今度の風はさつきよりも強い！！

「きゃっ！！」

取り巻きはその風にひいてしまう。

しかし、私はひかずに神奈子先輩めがけ、

勢いよく飛び込んだ。

勢いよく転んでしまう。

長そで長ズボンのおかげでなんとか助かったがそれでも、
ひざに痛みを感じる。

しかし、今はそんなことどうでも良かった。

私の手の中には、しっかりと神奈子先輩の星が入っていたから……

神奈子先輩が私に近寄ってきてくれる。

そして、何かが迫ってくるような勢いで、私に聞く。

「早苗！！ 大丈夫！？ 早苗！！」

泣きそうな顔をしている神奈子先輩を見上げる。

だめだ、安心させないと……

「大丈夫ですよ……先輩」

それだけ言つと神奈子先輩の目からは涙があふれていた。
あれ？安心させたかったのに……どうして？

「良かった……」

それだけ言つと神奈子先輩は私に少しの間だけ泣きついてくれた。
その時、私にはわかったのだ。

本当に一番の勝負をしていたのは神奈子先輩だったということが……
それだけ分かると、私はほほ笑んだ。

すると、神奈子先輩も笑って返してくれた。

そのあとは、意識を失ってしまつて私に記憶はなかった……

気がつくとそこは保健室だった。

どうやら私は寝かせられていたようで、

周りを見ても誰もいな……いた！！

そこには、すでに制服に着替えていた神奈子先輩の姿があった。ど
うやら、神奈子先輩がしばらく見ていてくれたらしい。

私は神奈子先輩と目があつた。

すると神奈子先輩は近づいてきた。

「お目覚めね 早苗 今日はお疲れ様」

「せ、先輩！！ すいません！！ 迷惑かけてしまつて……」

「いいの そんなこと」

すると、神奈子先輩はポケットから何かをとりだし、

私に握りしめさせた。

この感触は分かる。

神奈子様の星だ……

そして、神奈子先輩は優しい口調で話す。

「早苗ちゃんとこれとつたでしょ？」

私の星 願いをかなえる流れ星」

「はい」

「ふふ、早苗 願いがあるなら言っ てちょうだいね？
そういう約束だから」

「……」

何も思い浮かばない。

というか、特に何もしてもらう必要はない気がする。

そうだ、私はこれからもこの人と一緒にいたい。

「じゃあ、これからも一緒にいてください」

神奈子先輩は不思議そうな顔をする。

「そんなことでいいの？」

そう聞いてきたが、とんでもない、私には贅沢すぎることなのだから……

「いいんです」

「変な子ねえ そのぐらいなら星使わないでいいわよ」
すると、神奈子先輩はひらめいたような顔をする。

そして言う。

「じゃあ、この星で私の願いを叶えさせてもらおうかな」

「先輩の？」

「そう」

しばらく黙っていると、突然口を開く。

「来週の日曜日、デートしましょ？」

「で、で、デートですか！！」

「そう いいわよね？」

なだめるようにそういう神奈子先輩。

私は恥ずかしかったが、顔を赤らめながら黙ってうなずいた……

その頃、保健室外では……部外者たちが……

諏「青春だねえ」

文「スクープですね」

椛「そういうのはやめた方が……」

に「それにしてもべたべただねー 気持ち悪くなるねー」

雛「甘くいつて奴？」

静「あんまり盗み聞きというのはどうかと」

穰「静姉だつて聞きたいくせに」

さんざん、部外者たちが覗いているのだった。

すると、ふと椛が思いだす。

椛「文先輩！！ そういえば、私も文先輩の星とりました！！」

文「そういえば、そうね じゃあ、私たちもデートする？」

椛「は、はい！！」

一同「甘くいい！！」

茶番を繰り広げていた。

しかし、中で何か動きがあるようだ、みんなが聞き耳を済ませると

……

神奈子先輩が私に向かって話す。

「でも、今日はビックリしちゃった だって、早苗に好きって言われちゃったから」

「……」

そうだ、私、言っちゃったんだ。

神奈子先輩のこと、好きって。

体がものすごく暑くなる。

穴があつたら入りたい。

「えーと、あれはですね！！ その、なんていうか、あの……」

「分かっているわ」

神奈子先輩が私の方を振り向く。

もしかして、この状況って……（外野も期待中）

「驚いちゃった！！ あれも作戦でしょ……」

「はい!？」

え、どういうこと？

「誰の入れ知恵!? 諏訪子!? それとも文!？」

私の心の中の何かが崩れさる。(外野もずっこける)

この人に私の気持ちが届くのは、まだまだ先のようだ。

私はその夜、一人家のベランダから満天の星空に向かい、
バカヤロー!!! と叫んだ……

後日談であるが、生徒会の中で捕まったのは神奈子先輩だけだったらしく、

このことは、ひとたびビクニユースとなった。

秋姉妹は立っただけなのに捕まえられなかったのだという。姉は普通に逃げきったようだ。

部長はほぼ、全滅だったがその中、にとり先輩は生き残ったらしい。なぜだろうか、

そして、またある日の昼休み、弁当を忘れた私は購買にパンを買いに行く途中、

「ちょっと、東風谷さん こっちに来てもらえるかしら？」

また、私は取り巻きの人たちに呼び出された。

相変わらず、懲りない人たちだと思っただが様子が違う……

「なんですか？ 今日は何？」

「そんな、睨まないで、私たち、あなたに謝りに来たのよ」
「謝りに？」

「そう、私たち、八坂様のことを何も理解してなかったってことがよく分かったの」

「あの人の迷惑になっっているとも知らないで」

「もう、勝手にあの人を使って悲劇のヒロインみたいな真似はやめ

るわ」

「……どうやら、もとは悪い人たちではないようだ。私も笑いながら言う。」

「分かってくれれば、いいんです」

すると、取り巻きの一人が凄く興奮して私のもとにやってきた。

「そこでね、私たち分かったの！！　あなたのあの方に恋する美しい姿勢！！」

これを応援しなければならなかったことが！！」

「はい！？」

「今日から私たち、あなたの恋愛を応援します！！」

「がんばってね！！」

「余計なお世話ですから！！」

私のむなしい叫びをよそに、私と神奈子先輩の恋愛応援隊は結成されてしまった。

そんな状況になっても、私の気持ちにきずいてくれない神奈子先輩に、

失礼ながら、バカ！！と言ってやりたかった……

完結！！ 八坂神奈子捕獲計画（後書き）

くだくだなりに進展？

初デートと言っのは甘酸っぱいもので（前書き）

馬鹿話

初デートと言うのは甘酸っぱいもので

「お姉ちゃん」

「なに、早苗？」

「お姉ちゃんってさ、デートしたことある？」

今、私東風谷早苗は最大に困っています。

今週末は神奈子先輩とのデートの約束がありますが、そのプランが全く決まっていません。

そこで、恥も承知でうちの姉に相談を試みたんですが……

「あるけどさ、役には立たないと思うよ？」

「どうして？」

「私は熟練すぎるから」

……何言っただこいつはと思っていた早苗だがとりあえず教えて貰わなければならない。

「なんでもいいので教えてください お願いします!!」

とりあえず、頭を下げてそうやっていう。

虫一匹の力ですら今は借りたいから……

「といってもさ、私の場合はデートしたいって言ってきた子がさ、二度と現れなくなるような感じだから」

「……」

どういうデートをしているのだろう？

ていうか誰とデートしているのだろう？

この人……

まあいい、参考程度になればいい。

「まず、いつもはどうしてるんですか!？」

「単純だよ ぶらぶらと遊んでディナー食べて、そのあとは夜の時間を楽しみつつ……」

「もういいです!!」

こいつに聞いたのが間違だった。

こいつは、最近分かったが幼女の皮をかぶったおっさんだから……
「あー 待ってよ早苗ー!!」
無視 他に役立ちそうな人はいないか……？

「ということで私の所に来たと？」

「はい、お願いします 文先輩」

ということで、私は恋愛相談所としても人気がある文先輩の所に来
ています。

とりあえず、悩んだらこの人の所に行けって誰か言ってた気がする
ので……

そつえば、今は文先輩と雛ちゃんしかいないな、今日の朝から椀
ちゃんは、

抜け殻状態だったし……

文「うーん そうねえ どこまで決まってるの？」

早「朝10時 駅で集合以外には何も」

文「そうねえ…… なんかないかしら…… あ！ 雛！ 机の上の奴持
つてきて」

雛「これですか？」

そつすると、雛ちゃんは何やら紙切れを二枚持ってきた。

早「これは？」

文「映画のチケット 私と椀も同じ日にデートをいれてたんだけど
さ、

椀が親戚の結婚式に出ないといけないやらなんやらでこれなくなっ
ちゃって、

このままゴミにするのももったいないから二人で行きなよ」

早「ありがとうございますー!!」

やはり、役に立つ人は違う。

ああ、ありがとうございます。

神様、仏様、文様、それと椀ちゃん。

文「椀もさ、楽しみにして多分すごくショックみたいで……だからさ、私たち二人の分まで楽しんできてよ」

早「はい!!」

映画館でデートと言ったらラブシーンに突入してそのあとは、なんだか二人の間もラブシーンみたいになってそれで……

雛「早苗」

早「はい!？」

雛ちゃんが私の名前を突然呼ぶ。

私は一瞬心臓が止まりそうになった。

早「なに？ 雛ちゃん」

雛「その映画、ホラー系……」

早「ホラー？」

チケットをよく見てみる。

するとそこには最近話題になっているホラー作品の名前が書いてあった……

早「なんで、デートでホラーなんですか!!」

文「うーん、私が好きなのと椀の怖がる反応を見てみたかったとか？」

早「……」

どうしてこう、悪魔みたいな人たちだらけなのだろう？

椀ちゃん、あんたも苦労するねえ……

文「でもさ、もしかしたら八坂先輩凄い怖がるかもよ？」

……確かにそうかもしれない。

何んとなくで分かるけどあの人ビビりだと思っから……

早「……わかりました」

文「うん、それでさ そのあとなんだけど、これを上映してる映画館さ、

なんか日本最大規模ぐらいのショッピングモールの中にあるからさ、そのあとはそこで楽しめば？」

今のは役に立つ。

そうか、そこでランチを食べたり、服を買ったり……
いいかもしれない。

早「ありがとうございます 参考になりました」

文「いいって、それよりもさ、絶対に成功させてよ？」

応援してるから」

早「はい……」

少し恥ずかしい。

まあでも、私は神奈子先輩のことが好きだけど向こうは、
知らないだろうから成功も何もないのかもしれないが……

その後、新聞部の部室を抜けて、

いつも通りに神奈子先輩と生徒会で働いたあとは一緒に下校をする。
そこで、神奈子先輩は聞いてくる。

「早苗 ごめんなさいね 私からデートしようって言ったのに全て
任せっきりで」

「と、とんでもないです!!」

本当にそう思う。

私みたいな人と神奈子先輩が一緒にいるだけでも普通はおかしいと
思うのに……

それがデートなんて言ったら、精一杯おもてなしをしなければ!!
!!

私は、神奈子先輩に確認する。

「それじゃあ、今週末、駅に10時集合ですよ」

「ええ、分かったわ」

神奈子先輩との分かれ道が近づく。

いつもどおり軽く挨拶して別れる瞬間に神奈子先輩がいつていくれ
る。

「今週末は楽しみにしてるから」

「は、はい!!」

それだけ言つと神奈子先輩は足早に去っていつてしまった。

その足取りはとても軽く、楽しそうで、
逆に私の中のプレッシャーを大きくさせているような気がした……

デート当日、私はかなり早く駅についてしまった。

自分が緊張していたこともあるが、家にいずらかったので……

きのうは、家に帰るとなぜか諏訪子お姉ちゃんがいた。

そして、うちの母親にデートのことをばらしたのだ。

すると、お母さんは明日は勝負の日！っとはりきり、

（以前神奈子先輩が家まで来たことがあり、その時に惚れたとか）

私の勝負服の審査をさせられたのだ。

その結果、私の服装はいかにも良家のお嬢様しか似合いそうにない、
純白のワンピースになってしまったのだが……

なんとなくわかる、自分でも似合ってないってさ……

似合いたいけど……

そんな事を思いつつ、しばらく待つと前方から神奈子先輩の姿が見えた。

「早苗 待った？」

「……」

「早苗？」

私はしばらく神奈子先輩の私服姿に見とれて神奈子先輩の声が聞こえなかった。

赤と黒を基調とした大人びた印象を受けるドレスのような感じの服を着ている。

あまり、嫌味すぎない程度にレースも付いていて、

いい感じの大人っぽさが全面的に押し出されている。

何よりも、着る本人が美しいからこそ、そこまではえるのだろうか……

しばらく見とれていたが、神奈子先輩が声をかけているのに気が付

く。

「早苗」

「は、ハイ!!! 何でしょうか!？」

すると、神奈子先輩は私に近づいてきて全体を見ながら言う。

「あら、とっても可愛いわね、早苗」

「は、ハイ!？」

今私可愛いつて言われたよね?

ああ、もう死んでもいいかもしれない。

「ほ、本当ですか? 神奈子先輩!！」

「ええ、とっても可愛いじゃない とても清楚で、お姫様見たいよ?」

とんでもない、私ごときが姫なら、この人は美の女神だ……

私が、しばらく身もだえしていると神奈子先輩は突然前を向く。

「それじゃあ、行きましょうか? まずは、何処に連れて行ってくれるの?」

「え!?! あ、はい はじめは映画を見に行きたいのでちょっと郊外まで」

「分かったわ いきましょう」

そうすると、私と神奈子先輩は歩き始めた。

そうだ、今日は私が神奈子先輩をおもてなさなければいけない。

一分一秒も無駄にはできない。

今日いっぱいには精一杯神奈子先輩を楽しまなければ!!

映画館への途中までで、神奈子先輩に聞いてみたが、ホラー映画は少し苦手とのことだ。

私も好きではないけど、苦手っていうほどのものでもない。

まあ、もしも本当に怖かったら、神奈子先輩に泣きついてアピールするつもりだったのだが……

神奈子先輩の様子はどう見てもおかしい……

なんか、始まる前から青ざめてるって言うか、死にかけてるって言うか……

「神奈子先輩、大丈夫ですか？」

「大丈夫……大丈夫……」さつきから、これしか言わない。

先ほどから不安しか感じない。

しばらくそのままだったが、とうとう上映がスタートする……
と言う前の宣伝タイム。

そこでの反応で神奈子先輩の趣味が大体わかった気がする……

可愛い動物のハートフルストーリー……目を輝かせている。

最新鋭の特殊効果をふんだんに使ったアクション……微妙

近日話題のアニメ映画……興味あり

ホラー映画……青ざめる

話題の恋愛もの……興味なし

といった感じだった。

……恋愛には興味ないんですね……先輩

ここまでは、まだ良かった。

しかし、映画の本篇が始まると……

すでに、先輩は縮こまっている。

まだ、日常の何にもないパートなのに……

その様子がおもしろくて、不覚にも笑ってしまう。

これは、もっと怖いパートに入ったとき私に泣きついてくるんじゃないかと、

期待してしまふ。

だが、神奈子先輩は私の想像よりもだいぶ上をいくもので……
そういうシーンが始まった。

神奈子先輩は叫びながら私に抱きついてくる。

ここまでは私の予想通り、

その頭をなでながら私はゆっくりと神奈子先輩をなだめる。

しかし、何かがおかしい。

抱きつかれている私の胸辺りが死ぬほど冷たい。

そして、とても湿っている気がする。

まさかとは思ったが、神奈子先輩はすでに大号泣していた。

滝のような涙がこぼれている。

私はだいぶ慌ててしまったが、このまま映画を見続けるのは不可能だと思ったので、

慌てて係員の人を呼ぶと、二人して退場させてもらった。

この怖がりがたは、少し苦手の範疇で呼べるものではなかった……

その後、係員に連れられ医務室につき、神奈子先輩が落ち着くまで待った。

何となく不安は感じていたんだよ……不安は……

この人は、良くも悪くも期待を裏切らない人だから……

しかも、服も濡れてしまつてこつちとしてはかなり困っている。

お姉ちゃんからの借り物なのにいったいどうしよう……ん？

服をこすっていたら胸のあたりに何かがあることに気が付く。

誇りでもついたのであるうと思つていたが、これは何か見覚えがある。

前のパーティーで見たような……あ！！

私はそれを思い出した。

にとり先輩の発信機に似ているが、それよりも少し大きい。

おそらく姉の仕業だろう。

あいつらしいって何をたくらんでやる……

そのころ、某にとりの家では……

に「だめね、会長、どうやら気付かれたよ」

諏「マジ！？にとりちゃん」

文「特ダネがー!!」

雛「……馬鹿」

いつものように外野が覗いていた。

今回付けたのは、盗聴機能付き発信機だったとか……

諏「こうしちゃいられない!! みんな、いくよ!!」

雛「どこに？」

文「もちろん決まってるじゃない!!」

に「ラブラブさんの所」

雛「本当に馬鹿」

だが、どうやら動き始めてしまったらしい。迷惑な外野が……
その時の早苗は知るすべもなかった……

「ごめんなさい 早苗」

「いえ、いいですよ!! 私こそこんな映画に連れて行ってしまって、
申し訳ありません!!」

医務室で神奈子先輩が落ち着くと、先輩はものすごく謝ってくれた。
「私ね、ホラー映画って見たことなく……ただね、
そういうものは少し苦手程度だったんだけど、映画館の迫力にやら
れちゃって……」

「大丈夫ですって!! 私は怒ってません」 「本当? 早苗」

「ほんとですよ」

やさしく微笑みかけて言う。

実際神奈子先輩が悪いわけではない。

悪いのは映画会社だ。そんな展開作ったら神奈子先輩怖がっちゃう
じゃないですか!!

特殊効果にばかり、音声にばかり……

映画館も悪い!! 大迫力のスピーカーで音を鳴らしたり、
迫るような画質のスクリーンで神奈子先輩を怖がらせないで下さい

！！

しかし、それは映画会社にも映画館にも大ダメージを受けるような

……

でも、とにかく神奈子先輩を怖がらせないで下さい！！お願いします！！

よし、映画会社への批判もこのへんにして神奈子先輩の方を向く。

映画を見たあとはランチを食べに行くつもりだったが今はそんな気分でもないだろう。

というか、この服も濡れているし、疑わしいので服を買いに行こう！！

「神奈子先輩！！ 顔をあげてください！！ 服でも買いに行きましょう！！」

すると、まだ多少涙目だった神奈子先輩も笑顔に戻ってくれた。

「ええ、行きましょう！！ 早苗」

どうやら神奈子先輩も楽しむ気になってくれたらしい。

そうだ、まだ今日という時間はたくさんある。

これから大切に楽しまなければ……

このショッピングモールは、日本最大級といわれているほど、ものすごく大きくたくさんのお店がある。

とても一日ですべて回りきれるようなものではない。

私と神奈子先輩は現在そこで、服屋をめぐっているわけなのだが……

「早苗 次はこれを着ればいいのね？」

「はい！！」

「ねえ、早苗？ さつきから、ずっと試着してる気がするんだけど……」

そんなことはない！！ まだきつと先輩の服を選びだして1時間過ぎたくらいだ！！

私にはまだ、あと10着以上着てほしい服がある。

きつと、元の素材がいいから楽しいんだろうな……これ……

しかし、神奈子先輩は飽きてきてるみたいなのでこちらでラストにするか……

まだ試したかったなあ、試着。

今までは大人っぽいのを多くやったけどどうしよう？

周りを見渡してみると、青色のミニスカートとそれとペアになっている服が置いてある。

なんだか、うちの姉がよく着てる服っぽい。

しかも、ちょうど良くこんな子供っぽいやつ神奈子先輩サイズの奴が置いてあるなんて……

はっ！！ 私の心に何かが響く。

なるほど、これは天からの声だ。

つまり、この服を神奈子先輩に着させるって言うことですね……？

わかりました。

「じゃあ、最後にこれお願いしますー！！」

「分かったわ」

そういうと、神奈子先輩は試着室の中に入っていく。しかし、なぜこんなにも都合よくこの服が……

文「やりましたね！！ 会長」

諏「まあね」

に「この河城にとり開発の天からの声発生装置の実力なり」

雛「……ごめん 早苗」

用意していたのは、役に立たない外野軍団だったようだ……

しかし、早苗にそれを知る由はなかった……

しばらくすると、試着室から神奈子先輩の声が聞こえる。

どうやら着替え終わったみたいだ。

しかし、神奈子先輩は顔だけしか出さない。

「早苗……私にこういうのはどうかと……」

「どうしたんですか？早く見せてください」

しかし、いつまでもカーテンを開けてくれそうにない。

なので、いつそもう、無理やりカーテンをはぎ取ることにした。すると、中から出てきたのは、あまりにもセクシーすぎる、とても子供には見えないが子供服をきて、顔を赤らめている、美しすぎてかわいすぎる神奈子先輩（18歳）だった……

私の中の何かが崩れる音がする。

鼻から何か生暖かい液が流れているような気がする。

そうか、これは私への天からのご褒美なんだ……

しばらくすると、意識がもうろうとし始める。

すると、私は意識を失ってしまった……

「早苗！！ 大丈夫！？ 早苗！！」

神奈子先輩が私に対して呼びかけている。

その格好のまま、ごめんなさい、神奈子先輩、今は反応できそうにないです……

その様子を見て外野は

諏「計画通り」

に「文、写真わ？」

文「もちろん ばっちり！！」

雛「面白すぎる……」

最後の良心、雛までもが沈没した状態だった……

「ん？」

神奈子が外野たちの方を振り返る。

すると、外野たちはどうやら神奈子に見つかったようで……

諏「うわ、やばっ！！ 逃げ……」

簡単に捕まってしまった。

神奈子の笑顔が妙に怖い……

その日、改めて諏訪子（それを含めた外野）は神奈子の恐ろしさを理解したのだった……

しばらくして、意識が戻ると、私たちはまた医務室にいた。
私たち、今日一日でいちばんここにいそうな気がする……

私が目を開けると、神奈子先輩と目があった。

「こんばんわ 早苗」

「こんばんわ？」

私は時計を見る。

すると、すでに時計は6時を超えていた……

先ほどから計算すると、私は2時間ほどここで寝ていたら……

「6時！？ 申し訳ございません！！ 神奈子先輩！！」

「い、いいのよ 全然気にしないで」

「本当にすいません……」

私は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

すぐに立ち上がろうとする私だが、力が入らない。

どうやら、血が抜けすぎたようで……

「慌てなくていいわ 早苗」

神奈子先輩は優しくそういう。

そういえば、よく見ると私は着ている服が変わっているのに気がつ
いた。

白地に青のラインの入った、さわやかな印象のワンピースだ……

「ああ、服だけだね なんか血まみれになっちゃったから変えてお
いたわ」

まさか、神奈子先輩が自分で？

やばい、想像しただけでまた鼻血が……

「それからね、もうしばらくここで休んだらディナー食べに行きま
しょ？」

神奈子先輩が唐突に話しかける。

ナイス！！ 鼻血カット！！

「デイナーですか？」

「ええ、そうよ」

なんかプランを考えるのは私の役目だった気がするの……
まあ、いいか。ここは甘えておこう。

「行きましょう」

私はそういうと立ち上がる。

寝てなどはいられない。

だって、一分一秒とも無駄にしたくないから……

わたくし、東風谷早苗はまだ、見たことのない世界に入っておりま
す。

この、ショッピングモールの最上階にあるなぜこんなところに出店
したと、

言わんばかりのきれいなレストランに来ています。

かなりの高級店らしいのですが、大丈夫なのでしょうか？

「あの、神奈子先輩？」

「どうしたの？」

「お金大丈夫なんですか？」

私は聞いてみる。

理由は簡単。心配だから……

「大丈夫よ ほら」

すると、神奈子先輩はなんかのチケットを取り出す。

それをよく見ると、この店の名前と何とかコースの無料券というの
が見れた……

「あの、先輩？」 「なに？」

「よくそんなもの持ってましたね……」

すると、神奈子先輩はクスリと笑う。

「ええ、そうね 神様がくれたのかも……」

「神様ですか？」
とりあえず謎は深まるがとりあえず値段の心配は消えたのでよかった……

その頃、外野組は……

諏「ひどい目にあったね！！」

文「笑い事ですか！！ ネガは守ったけど……」

に「それにしても、雛ちゃんよくあんなもの持ってたね、なかったら今頃私たち土の底だよ？」

雛「まあ、私の父の会社の経営する店ですから……」

一同「えっ！？」

こんなところに神様がいたなんて、早苗に知る由もないが……

出てくる料理は全て絶品だった。

コースだったので次々と出てくるが、どれもおいしいので簡単に食べれてしまう。

「おいしいですね！！ 先輩」

「こら、早苗 静かに」

「すみません……」

と言われてもこんな店には来たことがないので、つついマナー違反を起こす。

それに比べて、神奈子先輩はきちんと食べているように見える……が、

「先輩、一向に食べていませんね……」

「ナイフとフォークってあんまり使ったこと無いのよ……」

まあ、結局は似た者同士のようだった。

もうそれからは、マナーなどは気にせず普通に食べた。
食べ終わると、私たちは話を始める。

「なんか、申し訳ありません……私が計画を立てるって言ったのに、失敗ばかりで……」

「いいのよ 早苗 あんまり気にしないで それに」

神奈子先輩が私の方を見つめる。

「今日は楽しかったわ いろいろ初めてのことができて」

「そ、そうですか……」

ぶっちゃけ、映画は文先輩任せ出し、服屋は勝手に暴走してしまうし、

この食事は神奈子先輩がやってくれたような気がしたが……

「もう、行きましようか？」

「はい」

それだけ言つと私たちは勘定を済ませ、この店を立ち去つた。

その後、私たちはショッピングモールをあとにし、
帰宅することにした。

周りはもうすっかり暗い。

「早苗 今日は楽しかったわ」

「私も、とても面白かったです……」

なんかこれで別れてしまうのもったいない気がする。

せめて、何か最後に残しておきたい……

「そっだー!! 早苗」

そついうと、神奈子先輩は何かポケットから取り出す。
すると、私の掌に乗せた。

それは、少し蛇をモチーフにしたような髪飾りだった。

「これは？」

「今日の途中で見つけて買ったの 私、ちょっと変わってるかもし

れないけど蛇が好きでね」

「はあ……」

「今日の思い出をこれに残しておいてね？」

「……」

しばらく私は黙っていた。

嬉しい、こんなことがあつていいのだろうか……

「どうしたの？ 気に入らなかった？」

「そんなことないです！！ これ、ずっと使い続けます！！」

「そお？ 嬉しい」

どうしよう？

私の胸の中で今、一つだけしてもらいたいことがある。

ここは思い切つて言おう！！

「あの、先輩」

「なに」

「これ、今、先輩の手で付けてもらつていいですか？」

言つてしまった！！

でも、このぐらいならしてくれるはず……

あれ？

なんだか、神奈子先輩の顔が凄く赤くなっているような……

「あの、先輩？」

「ああああ、あのね、早苗！！ 今日遅いからもう帰りましょ！！ 気を付けてね それじゃあね！！」

そういうと、神奈子先輩はものすごい速度で走つて帰ってしまった。

「あれ？」

道にポツンと一人だけ残された私…… とてもむなしかった……

髪ぐらいなら、入学前でも触つてきてくれた気がしたのだから？

なにはともあれ、多分人類でいちばん今寂しいのは、私だった……

「神奈子のヘタレがでてきてしまったか……」
その様子を一人覗いてい諏訪子はそう呟いた。
そして心から思う、頑張れ早苗、道は長いよっと。

その翌日、ミニスカート姿の神奈子先輩の写真の載った新聞を、
文先輩が出したのは言うまでもない……

初デートと言っつのは甘酸っぱいもので（後書き）

私の中の神奈子様のイメージは、
総受けなのだが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0547i/>

学園東方～普通の私と風神様～

2010年10月12日14時20分発行